

家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

1991 11



第90巻 第11号 日本幼稚園協会

「保育の再点検」の大きなねらいは、社会性の育成にあります。

子どもの社会性を育てるにはどのような保育をしたらよいかとお考えの先生方に、きっと役立つ〈全5巻〉です。



保育の再点検〈全5巻〉

①望ましい生活習慣

②望ましい集団づくり

③望ましい当番活動

④望ましい行事と生活

⑤望ましい言葉の指導

本シリーズの特色は、

- 日常的で身近なテーマをとっています。
- 保育事例を分析し納得いくまで話し合われています。
- 現場からの声として、よその園の保育が紹介されています。

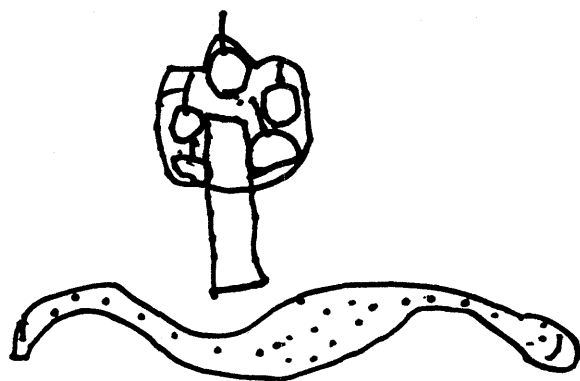
平井信義・大場牧夫・森上史朗 著

A5判・セットケース入り・各208頁・セット定価6,953円(税込)

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)3292-7783(代)にお問い合わせください。

キンダーブックの
フレーベル館

幼 児 の 教 育



第90卷 第11号

幼 児 の 教 育 目 次

— 第九十卷 第十一号 —

© 1991
 日本幼稚園協会

へ巻頭言／幼稚園と小学校との一貫性……………秋山 和夫（4）

状況の中で保育はなされる……………津守 真（6）

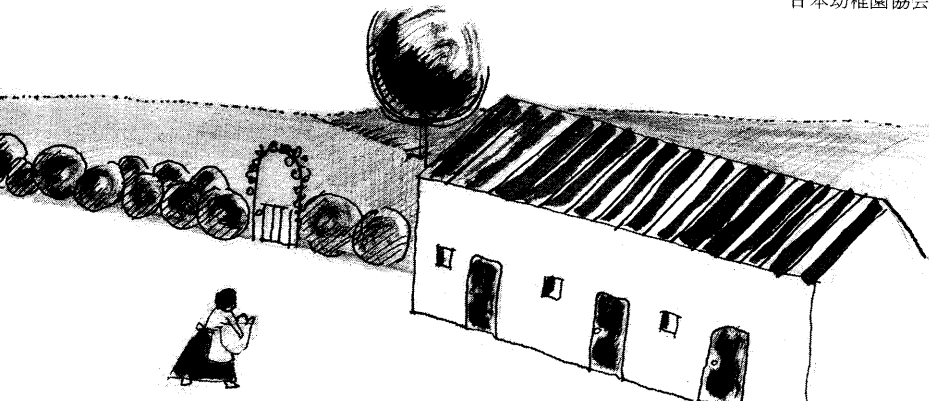
子どもから何をどのように学んだらよいか

共に育つということ……………藤田美美子（12）

附属幼稚園の教育（8） 活動について……………村石 京（19）

「住まい」のイメージ

生活空間のドラマ……………西村 一朗（24）



子どもの夢の家……………村松 明子 (32)
傘の家から……………宮里 暁美 (38)

保育者養成の今日的課題(6)

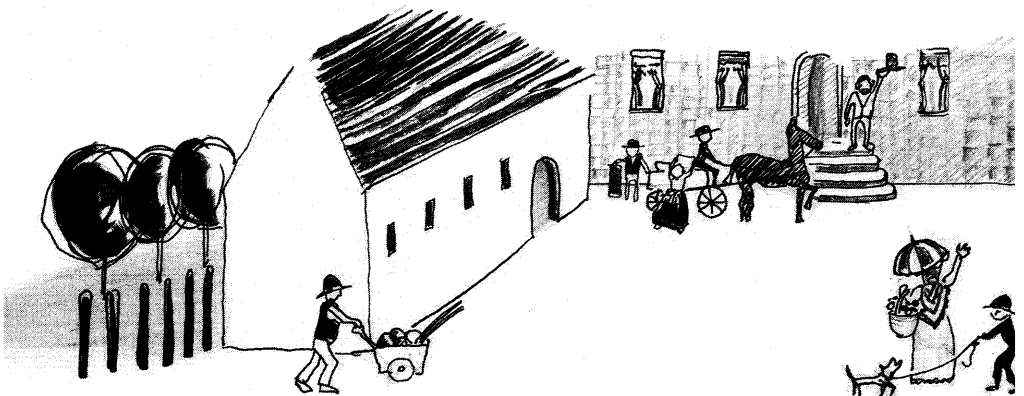
少子化傾向を中心として……………動物実験の試み……………前田あけみ (45)

ある日の育児日記から(11)……………佐藤 和代 (53)

若いお母さんたちへ

オランダ便り(2)……………向山 陽子 (54)

表紙版画・樫村 文夫／扉題字・堀合 文子
扉カット・お茶の水女子大学附属幼稚園園児
カット・福田 理恵
編集委員・本田 和子／豊田 一秀・吉岡 晶子
編集部・大沢 啓子



幼稚園と小学校との

一貫性

秋山 和夫

本年度から、新しい幼稚園教育要領に基づいた実践が幼稚園で展開されており、来年度からは、新しい小学校学習指導要領に基づいた実践が小学校で行われることになる。

今回の教育課程の改訂を支える精神には、注目されるべきものが少なくない。その中のひとつに、幼稚園と小学校との関係について明確な方向と方法が示されていることは、高く評価すべきことであると言つてよい。

幼稚園と小学校との関係をどう考えるかという問

題は古くて新しい問題である。和田実や倉橋惣三をはじめとする幼稚園教育や教育の本質を理解した人々は、幼稚園教育の内容や方法を小学校へ拡大していくことの正当性を主張してきた。

これに対して、教育は知識や技能を少しでも早くから、より多く身につけさせることだと考える人達、例えば、早期の才能開発や能力主義による人材育成を主張する人達は、小学校教育の内容や方法を幼稚園に下向させていくことを主張してきた。

幼稚園教育は、この二つの考え方の間をゆれてきたというのが現実であろう。

今回の教育課程の改訂においては、幼稚園から高等学校まで、「学ぶことの楽しさ」や「成就感」、さらに「自ら学ぶ意欲」を重視している。

かつて、倉橋惣三は幼稚園では子どもが「生活の満足」を味わうことが大切であると強調した。生活の満足は、楽しく学び、楽しく活動できること、そ

して、成就感が味わえることなどがその条件となる。この点でも、幼稚園教育の原理が小学校教育の原理として拡大されていったことになる。

また、「自ら学ぶ意欲」を重視しようとすることは、子どもの主体的な自己活動への着目である。幼稚園教育は本来、子どもの自主的、自発的活動を促すことを重視してきた。

更に、今回特筆すべきことは、小学校低学年に、これまでの「社会科」「理科」を廃止して「生活科」が新設されたことである。

生活科を簡略に言えば、子どもの「具体的な活動や体験を通して」「総合的に指導」する教科である。幼稚園教育も幼児の具体的な活動や体験を通して総合的に指導するところにその特質を有する。また、生活科では「遊びや生活を工夫」することが教科の目標として挙げられており、教育内容として遊びが位置づけられている。この意味でも、生活科は

幼稚園教育に近い教科である。

また、小学校低学年の国語においては、「聞くことと話すことの指導の重視」が挙げられており、算数では「具体的な操作などの活動」の大切さが指摘されている。

生活科を熱心に研究している小学校教師は、異口同音に幼稚園教育を理解することの必要性を訴えている。それは、生活科の教育を確立していくためにも、新しい小学校教育を展開していくためにも、幼稚園教育の理解が必要不可欠とされているからである。

従って、望ましい幼稚園教育を確立して、それを小学校教師に提示していくことが、幼稚園教師の責務のひとつでもある。そのことによって、望ましい小学校教育の展開が可能になっていくとさえ言えるのである。

(岡山大学)

状況の中で保育はなされる

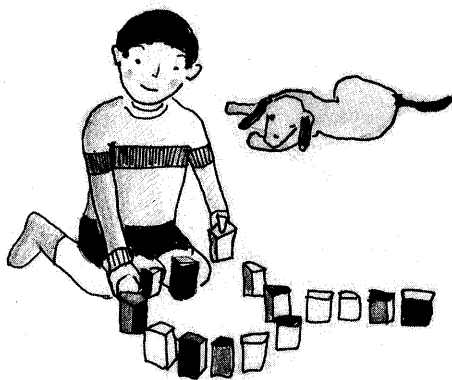
津 守 真

ひとりの子どもとつき合っているときも、保育者は保育の場の全体の状況をみてとっている。たとえば、新しい子どもや特に手をかける必要のある子どもが来たときには、自分がいままでつき合っていた子どもをおいて、その子を優先させることもある。

全体の状況を優先させすぎると、抜けがないように見回る保育になって、保育に落ち着きがなくな

なる。逆に、全体の状況を見捨ててひとりの子どもにのみめりこむと、関係が他の子どもたちにかたわってしまふ。実際の保育はその中間にある。

ひとりの子どもと出会うことは、その子どもとゆつくり過ごす機会に恵まれることである。そのときにゆつくりと過ごすことが、その後の活動の糧になっていることが多い。その保育者との間に



生まれた活動を最後まで見届けることができずにその子を離れても、それはどこかで実っている。

保育者との間に積み重ねられたそれまでの状況によつては、他の子どものことはちよつとおいて、ひとりの子どもとのつき合いを継続させることもある。保育は長期にわたり、毎日継続することだから、そのときの状況だけでなく、時間経過の中の状況も考慮にいられて判断する。きのう十分につき合えなかった子どもと、出会ったときは、いつもよりも密なつき合い方をするかもしれない。

長期にわたり複数の人が生活する保育の場では、その日の状況と、時間経過の中の状況との両者がいりまじっている。ひとりの保育者が、あるときにはこのようにし、別のときには違ったように振る舞う。そのときの状況の中で自ら判断し、行為し、理解をつくり上げてゆく。

少し煩雑になるかもしれないが、状況とはどう

いうものかを、身近な保育の一日の中から述べてみようと思う。

夏の一日、朝、廊下にいた私は、保育室で担任のTさんと笑い合っているR子と目が合った。R子にはっこり笑い、しっかりと私の視線をとらえてはなさない。私も一緒に目を合わせて笑い、そのときを持續した。それがとても面白くなってR子は廊下に走り出たが、私の脇を通り過ぎ、二、三歩行って立ち止まり、私の方を見て笑った。以前もこういうことがあったが、その時はR子は関心のある人には真正面からは近付けないというようにに通り過ぎて行ってしまったのだ。いまはきつと私の方を見て笑うのである。何度もそれをやってから、とうとう私の腕の中にとびこんでできた。T先生と一緒にホールに行っても、戸口のかげにかくれて、私とイナイ イナイ パーをくり返す。その間でも、T先生の姿が一寸でも見えな

.....

くなると、ペソをかいて泣きそうになる。R子と私とのこの日の交わりは朝のひとつだけだった。この頃しばしば出会うこのひとときの密な交わりが、R子と私との関係を確かなものにしていくように思う。(この子どもについては、本誌89巻9号参照)

門からS夫と母親が入ってきた。三月まで私共の学校の幼稚部にて四月から普通学級にいったS夫の母は、久しぶりに私と話したくてたまらない様子で、庭の真中で学校での様子を話しはじめた。何人もの子どもが登校して傍を通っていったが、めったに会うことのないこの母親を私は優先させたいと思った。

それでもH男が登校して小走りに部屋に入っていたときには、私はS夫の母親との話を中断せざるを得なかった。H男の担任はそのとき手一杯

で登校してH男を受取る余裕がないことが分かっていたからである。部屋にとび込んだH男は、私と一緒にトランポリンをとんで欲しかった。いつもは朝一番に担任とトランポリンをとんで、気持ちを落착けてから彼は自分の活動をはじめるのである。私と一緒にとんでいるうちに、この子が次第に気持ちを寄せてくるのが分かり、私も嬉しかった。そのとたんに、H男はふと見えなくなかった。移動するときのH男の動きは素早い。あちこち探したら、二階の隅のプレールームで、テレビをつけ、ステレオを鳴らしてひとりだとびはねていた。しばらく一緒にいたが、私はこの子をここでひとりにおいておいて大丈夫のように思った。この日は庭にはプールがしらえてあり、プールの周辺は子どもたちで賑わっていた。H男はプールも好きなのだが、子どもが大勢いるところは避ける傾向がある。今日もそのようで、一番人の気配のない二階の隅の部屋を選んだ。

私は、階下の保育室におりてくると、さっきのS夫が私を見付けて、「えのぐ どこ？」とたずねた。私は五色入りのえのぐの箱を出してあげた。S夫は流しと机の間を往復して水を運びえのぐをはじめた。黒色を選び、プラスチックのまま

ごとの野菜や果物を次々に黒く塗った。本人はこれを「唐揚げ」と言っているのだが、普通学級でいろいろのことを経験しているこの子の気持ちをあらわしているのだらうと、私は床にこぼれた黒い水やS夫の足の裏を雑巾で拭きながら、興味深く思った。もしも、この子とつづけて交わる機会があれば、更に考えてゆけるのだが。幼稚園のとき、S夫は素裸になってえのぐを身体に塗りたくった時期があった。雲の上を歩いているような頼りなげなS夫が、自分の存在感を確かにしていったのは、えのぐを通してであった。久し振りに私共の所に戻ってきたこの子は、熱心にえのぐをして過ごした。H夫は幼児期に自分自身を形成

した場所で自らを癒しているように思えた。もっと長時間私がこの子と遊ぶことができたなら、別の展開があったかもしれないが、状況がそれを許さなかった。

トランポリンの上で、若いAさんが三人の子どもの相手をして苦労してとんでいるのが見えた。その中のひとりはまだ歩けない小さな子どもである。私はその子を抱きとって、庭のプールに連れていった。

保育は複数の子どもと大人の生活の場だから、ひとりの子どもと遊んでいても、それは皆の眼前に開かれている。私はある場合にはその子どもと密に交わりつづけるが、状況によっては、その子とは他の人に委ねて、別の子どもと交わる。いろいろな大人と子どもが、たえず変化する状況の中で互いに補い合い、保育の場は上向きにつくられてゆく。

T夫が門のところであらうろしているのが見え

た。この子は最近だれか大人と外にゆきたい。どうしてもそうしたいときには、それを叶えてあげないと、T夫の場合はそこで気持ちがつつかかって先に進まない。しばしばそれにつき会う担任のYさんが気付き、他の子をおいてT夫と外出するのが見えた。外にゆくと他の子どもにも妨げられることなしに、ひとりの大人とゆっくりと交わる事ができる。

帰りがけ、私はトランポリンの上にいるT夫と出会った。T夫は私に、一、二の三で高くとぶことを要求した。私も一生懸命それにこたえ、疲れて汗をかいたとき、T夫は本当にたのしそうに笑った。この子は電車の系列番号を知っていたり、丸と四角とどっちかなど、大人を考えさせることを言うので、つい知的な対応が多くなってしまったのだが、夢中になって汗をかいて遊ぶ体験が、この子には何よりも必要なのではないかと思った。

私がだれかに呼ばれて一、二分その場を去り、再び戻ってきたとき、T夫は泣いて母親の身体に顔を埋めていた。トランポリンでつまづいて足を滑らせたのだそうで、「大失敗」と口の中で言っていた。この子は、ころんだり、人とぶつかったり、一寸したつまずきでめげることが多い、若いAさんが気を引き立てて、T夫と他の子と三人で手をつないでトランポリンをとんだ。それがうまくいって、まわりの人も一緒に、「成功」と言って手を叩き、皆で賑やかに笑った。この日のT夫は比較的早くに立ち直った。その前に担任のYさんと門の外でゆっくりと過ごしたので、基本的に気持ち安定していた。その後を受けて、私はこの子どもの一日の最後の部分を一緒に過ごしたことになる。

更に帰りがけに、T夫は庭のプールに入ったと聞いた。大勢の子どもたちがプールにいたときには、そこで気を引かれながらも果たせなかったこ

とを、これらのことの後、やり終えて帰ることができた。私は朝からこの子のが気になって、いたが、私自身はかわる余裕がなかった。いろいろの人が全体の状況の中で出会ったところで判断し、思い切ってゆっくりと交わることによって、それが可能になっている。

日によっては、一日の中では子どもは満たされない場合もある。それに気付けば、次の日にそれは補うことができる。

ひとりの子どもとかわるときにも、それは全体の状況の中でなされており、また、その子どもとのかかわりの経過の中でなされているので、ある時点で第三者から見える部分だけを切り取って論じることが無理がある。それは一般論としての

議論の材料にはなるが、その場の保育者の行為からは離れる。

保育者の意識の面から言っても、周囲の状況を無視して、ひとりの子どもだけとかわるときには、関係が閉ざされてしまう。保育者はひとりの子どもとゆっくりとつき合うが、それは保育の場の全体の状況の中でのことである。逆に全体の状況だけを気にして、すべてにこたえようとすると、管理的になりやすく、ひとりの子どもとの交わりを深めることができない。再びくり返すが、実際の保育はその中間にある。状況に対する配慮なしには、理念も理論も意味をもたない。

(愛育養護学校)

子どもから何を

どのように学んだらよいか

～共に育つということ～

藤田 芙美子

日本保育学会は、昭和六十二年の第四十回大会から、会員が、自主的に企画、運営するシンポジウムを募集し、プログラムに加えるようになった。初めは二つのテーマで発足したこの自主シンポジウムは、最近では五つものテーマが並ぶことも多い。私はこのシンポジウムに、ある時は話題提供者の一人として（第四十二回大会・於 十文字学園女子短期大学）その他の大会では会場参加者として、毎年参加してきた。この自主シンポジウムは、企画の段階から、個々の会員の自由参加に開かれていることから、真にそのテーマについて討論し理解を深めたいと考える保育者、研究者たちが相談して討論者として集まることができる。したがって会場はいつも自由な雰囲気、フロアからの参加者を巻き込んで活気のある討論を展開する場となってきた。

昨年の秋、下山田裕彦氏（静岡大学教授）から「来年の保育学会、自主シンポジウムで、『子どもから何を、どのように学んだらよいか』というテーマで話し合いをしたいが、どう思うか」という問い合わせがあった。氏が企画されたその年の保育学会の自主シンポジウム「保育の実践と研究において、数量化は果たして有効か」

で、会場から私が発言したこと「保育者、保育研究者は、子どもに何かを指導したり、子どもの能力や行動を測定したり、数量化したりする以前に、子どもから学ぶことが沢山あるのではないか。子どもたちは大人とは違ったあり方で思考し、行動している」が心にとまり、それ以来「子どもから学ぶ」という問題を深めて考えてみたいと思っておられたということであった。この時の私の発言は、私自身が大人の価値観に基づいた音楽教育、音楽教育研究を行ってきた、そのような教育観のもとで、子どもの音楽能力や行動を測定したり、数量化してみたところで、子どもの本来の音楽行動の性質について知ることは少ないことを実感していたので、このこと

を他の保育者、研究者たちに伝えたいという強い気持ちからのものであった。したがって、「子どもに学ぶ」に關しては説明したいこと、多くの保育者、研究者たちと話し合いたいことが沢山あったので、このテーマでのシンポジウムの企画に即座に賛成した。

話題提供者のメンバーはすぐに決まった。子どもたちの心の近くにいる保育を、ご自身の四人のお子さんたちと、愛育養護学校・家庭指導グループの子どもたちを育てる中で、実践しておられる津守房江氏、静岡大学の大学院を今春終了された若い保育研究者の東義也氏、そして現在「紀の国子ども村」の建設にとりくんでおられる堀真一郎氏（大阪市立大学教授）である。お電話でシンポジウム企画の趣旨をお話しし、話題提供者になって頂きたいとお願ひしたところ、幸い全員が趣旨に賛同して下さり、参加を承諾して下さった。指定討論者には話題を刺激的に展開して下さる方をということで、保育研究者であり教育方法の研究者でもある小川博久氏（東京学

芸大学教授）をお願いすることになった。

メンバーが決まり、私も話題提供者と連絡係を引き受けることになってからの半年は、私にとってはシンポジウム開催当日に勝るとも劣らない程、学ぶことの多い日々となった。メンバー諸氏から寄せられたシンポジウムでの発表要旨を読み進めるにつれて、メンバー諸氏のお考えをもっと知りたいと思うようになった。そしてあらためてメンバーの著書を読み始めた。津守氏の『育てるものの目』（婦人之友社）、堀氏が翻訳をされた英国の教育者ニイルの著作集（黎明書房）、下山田、東氏共著の論文「自分自身になることとしての遊びについての基礎研究」（静岡大学教育学部研究報告書）などである。子どもと日常のやりとりの中で、子どもの内側にある意味を見だし、それに共感することによって、子どもから学び、共に育ってゆく著者たちの姿は、私が狭い経験の中で「子どもから学んだこと」を、さらに深めて考えるために、大きな示唆を与えるものであった。

シンポジウム当日は、用意された教室がほぼ満席とい

う予想以上に大勢の参加者が集まった。下山田氏の暖かく、かつ問題点を追求する司会のもとに、討議は終始、討論者たちと会場参加者たちが対話する雰囲気が進められた。

津守氏は、氏の保育の場である愛育養護学校・家庭指導グループに通う、四歳の男児と心が触れ合った出来事を次のように話された。

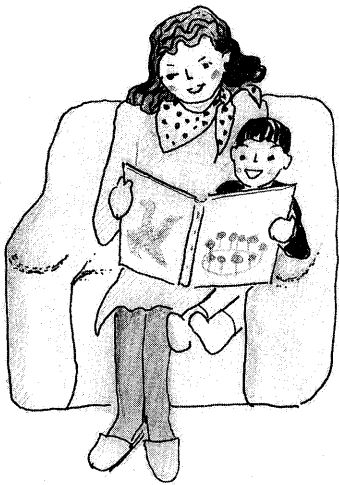
この子どもは気に入らないことが起こると他の子どもや保育者に乱暴したり、噛みついたりすることがあり、危険なことがあるので、そういう不安定な状態になったときには保育者が抱いて止めるということが保育者たちの話し合いで決められていた。ある日、子どもが大きなおもちゃのトラックを持って、滑り台を逆さ登りするのを後ろから押してほしいと要求したのに津守氏が応じて、お互いに息を切らして、危ない思いをしながら一緒に何度も滑り台を登りきるという出来事があった。このことがあった後、子どもが氏に対して心を開いた小さな出来事が幾つも起こった。この時に氏は初めて、この子

どもが本当は保育者にもっと抱き止めてほしいのだ、抱き止めてほしいから乱暴をするという構図が出来てしまっているのだということに気がついた。保育者は子どもの近くにいて、身も立場も低くして子どもが自ら生きていく力を支えながら一緒に生きてゆくことが大切である。それによって子どもは自分が背負っている課題を投げかけてくれることがある。それをどう受け止めるかは一回一回が課題なのである。氏は「保育の中で子どもから学ぶ」ということは身体を使って受け止めることだと思ふ、と結ばれた。

東氏は、子どもが遊びの中で自らを養っていく過程を、転居してきて、幼稚園年長児クラスに新しく入ってきたH君の遊びと遊びの変化をとりあげて次のように説明された。

H君と東氏の出会いは、クラスの子どもたちが大事に飼っているザリガニをH君が水槽からいきなり掴み出して東氏の前に差しだし、氏の注目を引こうとしたことに始まる。この後も東氏はH君を含めて他の子どもたちと

園庭にて、ビーチ・ボールでのキャッチ・ボールをするが、この時、H君は東氏が他の子どもに投げるボールを全部飛びついてとってしまふ。他の子どもたちはそのようなH君を非難して袋叩きにするが、ボールをしっか



り抱えたH君は抵抗できない。やがてボールを抱えて立ち上がったH君は彼らにボールを投げつけたり、砂をかけたたりする。その後もこういったことが数回にわたって起こる。東氏はこのH君の行為を本当は幼稚園の子どもたちと遊びたい、それでも今は沢山遊べないといういらだたしい気持ちの表れだという。H君の遊びはその後次第に変化する。それは他の子どもたちの出方を一歩退いて観察して関わるものであり、自らをコントロールするものとなる。このH君の遊びの変化の中に、東氏は子どもが自らの存在の仕方を捉え直し、自分を変化させる過程を見出している。そして、このような子どもたちのさまざまな信号、メッセージに答えるために自分がどう変わればよいのかを考えること、自分は彼のために何をするところができるかを真剣に考えることが「子どもから学ぶこと」ではないかと述べられた。

堀氏は『子どもから学ぶ』というテーマ自体に、学んだものを使って子どもをどうかしようという大人の傲慢さを感じる」と話をはじめられた。「子どもから学

ぶ」ということを意識した時には、それを「利用しよう」とするよりも「共に在ろう」とした方が楽しい、結果もよいはずだといわれる。氏は子どもたちとおもちゃづくりや絵本づくりをする中で、保育者としてのヒントを得たいと考え、観察を行ってこられたが、客観的な観察は子どもとの内面に触れることがすくないに気がつき、最近では、感動する場面を記述することが大切と考えておられるという。そして、子どもの行動に感動するということは必ずしも子どもが素晴らしいことをした時ではない。むしろ、へまをしたときである。例えば、絵の具をぬりたくって衣服まで絵の具をぬる——こういう子どもに触れたとき、私は嬉しくなる。そういう子どもたちの行動は私たちを解放する。出来上がった枠組を壊して新しい世界を開いてくれる。このような子どもに触れたとき、私たちは子どもから何かを与えてもらったと考える、と述べられた。

藤田は、子どもたちの音楽の学び方、あるいは作り方が、指導する大人が考えているそれと全くちがうこと、

子どもたちは日常の話し言葉で他者と真剣に対話する中で音楽的なものを学び、さらに創りあげる作業をしていることを、幼稚園での「子どもの歌」の指導場面と、藤田と子どもたちで遊んだ「飛んだ、飛んだ」のゲームの場面を例にとりあげて説明した。

「飛んだ、飛んだ」を子どもたちと歌いあったとき、私が歌の旋律に当てはめて「^{高い音}ごぼう」を「^{高い音}ごぼう」と日

本語のイントネーションを無視してうたったために、子どもから意味が解らないと指摘、訂正されたことについて述べ、子どもたちにとっては対話することと歌いあうことは連続した行為であり、「歌」は大人が考えるように人工的、表面的なものではなく、もっと気持ちに直接の表現であることを知ったことについて説明した。

四人の話題提供者たちの発言に対し、指定討論者の小川博久氏からは次のような事柄を、さらに明らかにすることの必要性が提案された。

自分は基本的には自己を変革することの必要性を感じている。しかし、四人の話を子どもとの関連性の中に置

いたときに、その事がどこまで自分に言いきれれるのかということについて考えてゆく必要がある。幼稚園や保育園の子どもたちは、さまざまな見えない形で、大人の常識を押しつけられているのが現実である。例えば、幼稚園には囲いがある。登園時間がある。お弁当はお昼の時間に食べなければならぬ。また、保育者は三十人もの子どもたちと相對しているのが普通である。一人の子どもとじっくり関わる時間はない。「皆さんお集まり」と保育者が言うとき、一人一人の子どものことは考えていない。このような時、四人の話題提供者たちが述べたことはどういう文脈に位置づくのか。四人が述べたことは、日常生活の中で位置づけなければならない。そうでなければ教訓になってしまう。幼稚園で毎日同じことを繰り返すことと、自分を振り返ることをどう位置づけるのか。自分の姿が見える装置をどう作るのか、が問題になる。小川氏の質問に対しては、話題提供者各々の立場から、子どもとの対応はごく自然なものであり、生きるためのぎりぎりのところで「共に在る」といった関係な

のである。一人の子どもと対応すること、集団の子どもに対することの間にはそれほど矛盾はないと考える、等の意見が述べられた。

次いで、会場の参加者からは、「子どもはおとなの常識に無理やりにはめられるのではなく、ついてくるというところがあるのではないか」「保育者が自己を変革するのは、ハッピーな気持ちでというより、むしろ追い込まれている場合が多いのではないか」「保育者は子どもが主体的に何かをしてゆくよう用意するときに、はじめて子どもから学ぶことが可能になるのではないか」「保育者は、自己変革をする用意がある、ということがまず大切と考える」等などの意見が寄せられた。

二時間二十分にわたってのシンポジウムは、子どもたちを目の前にする保育者、保育研究者たちが知見を分かちあい、さらに考えを進めようという熱意に満ちたものであった。討論者の誰もが子どもの生きる力を信じ、子

どもにとっての意味を共感するところから保育をはじめようとしていた。「子どもから学ぶ」ということから始まったシンポジウムが、このように熱心に討議されたことは、これからの保育と保育研究が「子どもの事実」に学ぶことを中心に考えて行かねばならないことの表れであろう。小川氏が問題提起された「子どもは目に見えないさまざまな形で大人の常識を押しつけられているという現実の中にいる」に対して、堀氏が答えられた「子どもに相對することは全て、どんなに頑張っても子どもに押しつけているということではないか、ということについては、もっと深刻な、本質的な議論が必要である」は、今回の討議をさらに進めるための方向を示している。

「子どもから学ぶ」ということを、日本の文化、社会の脈絡の中に位置づけて考える必要があるだろう。

(国立音楽大学)

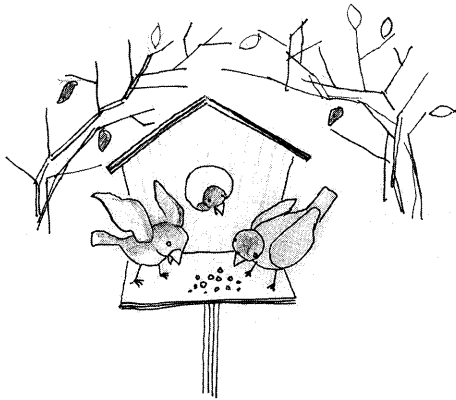
附属幼稚園の教育(8)

活動について

子どもの中から生まれた
活動を育てていくことゝ

村石 京

幼稚園の日常の生活の中では、いつも種々な活動が展開されています。それは子どもが自分自身でやりたいという意欲をもって創り出していく活動であったり、遊びの中から次第に育って広がってきたものであったり、あるいは年齢や時期を考慮した上で年間の指導



計画として組み込まれたものであったりしています。前者は子ども達の遊びの中で展開される自発的な活動であるのに対し、後者は幼児の発達を促し、偏りのない総合的指導をし、必要な経験をさせていくという教師の意図や配慮によって行われる活動であると考え

られます。

そして従来は、幼稚園の教育とは教師が幼児を指導し、よりよい方向づけをしたり、よい体験をさせることにあると考えられていたもので、後者の考え方が主流でした。それは子どもをよく伸ばし、子どもに合ったものであることは充分考慮されてはいましたが、子どもの側の要求から創られていくものではなく、園の実態や教師の考え方によって構成されていく教師主導型のものでありました。勿論、その時期、その年齢に適切なものとして考えられ、組み立てられた活動を行うことによって、子ども達は良い体験をし、良く成長することが出来ていったのだと思います。

附属幼稚園でも以前は、単元活動といって教師が中心になって組み立てたごっこ遊びをよく行っていました。その中には、いろいろな領域の活動がよく盛り込まれ、子どもたち

はその中で考えたり、話し合ったり、作ったり、遊んだりしながら進められるように組まれていました。子どもと教師は共に力を合わせながら一つの目的のために工夫しあって進めていきました。単元活動には種々ありますが、例えば、動物園ごっこ、乗物遊び、いろいろなお店、水族館や魚つり遊び等数多くあげることが出来ます。四歳児、五歳児の級でその計画を教師が話すと、子どもたちは目を輝かせて、その状況を想像したり、つくることや役割の相談などをしたものです。そして期間をかけてその活動が終了したとき、教師は満足感を持ちたり、あるいは思うように進展がなかったときは自分の力不足を痛感したりしたものでした。

これは、以前の保育の流れは教師が中心であって、子どもを大切にした保育といって、実際に教師は子どもと共に歩むことで教えら

れたり、その思いがけない発想に驚いたりしながらも、活動を進めていく中心は教師にあって、子どもがこれについていくことで教師と一体になっていったのだと思います。級中のみんながその活動に参加し、みんなの気持ちを合わせて進めていくときは、子どもにも喜びがあったと思いますが、それ以上に教師の資質、能力等によるところも大きく、教師自身の中に達成感や満足感もありました。自己の力や子ども達の力を結集しあった大きな活動は、教師も子どももそれによって前進し、充実感も大きくあったものです。

勿論そのことは認めながらも、ここで考えねばならないことは、幼稚園の生活は教師が中心なのではなくて、幼児が主体でなければならぬということなのです。子どもが自分自身で考え、自分でやりたいと思ったことが出来ることに大きな意味があります。主体的

に活動するとは、子どもが教師に依存的であつたり、受け身であつたりするのではなく、子どもが自分で、あるいは友だちと共に考えたことが出来る場であつてこそ意義があります。

このことに思いがいたった現在では、附属幼稚園では子どもに先立って教師が計画する単元活動などとは行つてはいません。また、時間を区切つて一齐に音楽リズムとか劇遊びをするために、子どもたちを呼び集めることもしなくなりました。

幼稚園とはあくまでも子ども中心の場です。そのためには、子ども一人ひとりが思う存分自分のやりたいことが出来る場であるように保障していかなければならないと思います。今日も一日、友だちと一緒に好きなことをして遊べる、この思いが子どもの心の中に充実感を持たせ、次の遊びへの意欲を起こさ

せるものだと考えます。

以前、計画的に活動を子どもに与えていた頃は、勿論そのときはそれで一生懸命であったのですが、今から思うと活動を行うことのみ気持ちが集中して、一人ひとりの子どもの心に目が向かなかったり、他のことをしたいと思う子どもの気持ちを汲むことが出来なっていたことが多くありました。他のことに興味があるために、教師の提案する活動に積極的でない子どもを意欲的でないと評価したりして、結局は子ども一人ひとりの心を見つめるゆとりが教師の側にもなかったということなのでしょう。

子どもの心は一人ひとり違ってきます。そして発達も違うし、興味も違ってきます。幼稚園生活においては、子どもが今やりたいと思ったことが充分出来るように、教師はそれを支え援助していくことこそ、教師の役割と

言えると思います。

そして子どもの遊びの中から生まれてきた活動に子ども教師は目を向け、それを育てていくようにしたいと思っています。教師の言葉かけ、援助、そして参加などによって活動は育ったり、すばまってしまったりする場合があります。またとかく大きな集団による大きな活動とか、長く続いたものへの評価が高くなりがちですが、子どもの心が充分それに向かっている場合は良いとしても、大きな活動を育てることにはみ多くの勢力が注がれてしまい、そのために小さな活動を見落としてしまうことがあってはならないと思います。

一人の子どもにとって、自分がやりたいと思ったことが充分出来るなら、それは活動の大小とは関係がないといえると思います。

しかしそれでも、子ども一人ひとりが充分に遊び込み、やがて級の中に落ちつきが出

て、級の一員としての自覚が芽生え出す二期後半から三学期にかけては、子どもの発意

で思いもかけず楽しい素敵な活動が生まれることがあります。私も教師は、子どもの中から出て来たものを充分な心配りをもって、大切に育てたいと思っています。例えば簡単な音楽劇への意欲が、小道具づくりやミニ劇場の設営までに発展したことや、積木でつくった基地や段ボールでつくった乗物などが

合わさって、遊園地ごっこに進められていたりしています。

教師側が子どもに先立って、活動を与えていなくても、園の生活の中では種々な活動が生まれています。子どもの中から生まれたものを見落とすことなく、そして適切な援助を行うことによって、活動は活き活きと育ち、進められていくと思います。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

「住まい」のイメージ (1)

生活空間のドラマ

、体験的空間生活発達論、

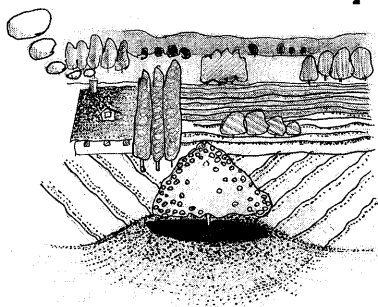
西村 一朗

はじめに

私達にはつきりと記憶されている風景の最初は恐らく四歳前後のものではなからうか。それ以前の出来事は、親等から教えられて、その気になっているにすぎない場合が多いだろう。だから、私も本稿では四歳位から始めて小学校に入るまで、つまり幼稚園までを振り返りながら住まいを中心に幼稚園にいたる空間生活（空間を使った生活）の様相を思い出して述べてみたい。同時に、その体験をもととして幼児のための生活空間のありかたについても少し考察してみたい。

最初の怖い体験

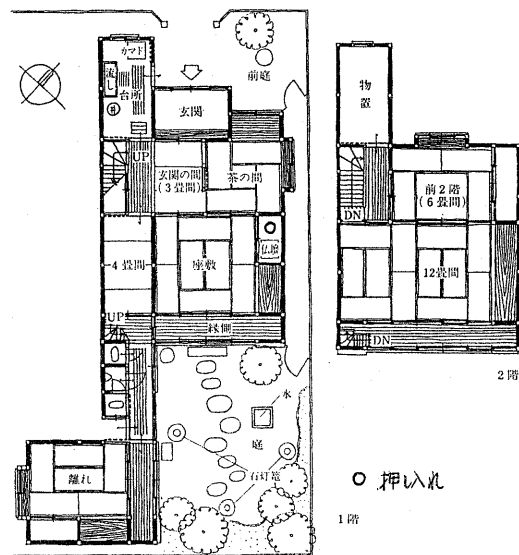
私が満四歳になったのは一九四五年（昭和20年）六月で、そのほぼ二カ月後に「終戦」となった。その直前、米軍のB29が富山を爆撃した時、金沢の上空を通った。その時、私は祖母と一階八畳間の押し入れに入り仏壇の横で防空頭巾を被って震えていた。その時の記憶は今も鮮明によみがえるである。祖母は念仏を唱えて「仏様、御先祖様が守ってくれる」と言っていたようだ。幸い金沢は歴史的都市ということで爆撃を免れたが、その時の体験が、その後大きくなってから狭く暗い空間で、か



えって落ち着く気分になるのに影響があると思っている。

子供の生活空間拡大過程

考えてみると私達は母親の子宮より生まれ落ち、母親の胸にかじりつき、やがてハイハイをし、立ち上がり



▲ 私の生まれ育った家〔金沢〕
(取り壊されていて、現在は無い)

段々と父親や兄弟姉妹の存在をも認識し、行動する生活空間も広がって行く。ベビー布団（ベッド）から部屋へ、部屋から住まい全体へ、敷地内から町内へ、そして町全体から更に広い空間へと広がる。それは子供にとっては初体験の連続である。そこでの体験は深く体と脳裏に刻まれるに違いない。従って、逆にその過程での生活空間のありようが子供の発達過程に大きな影響を及ぼすと言っても良いだろう。ここでは、私の体験に則して家から幼稚園までについて思い出して述べてみたい。

幼稚園以前の生活空間の広がり

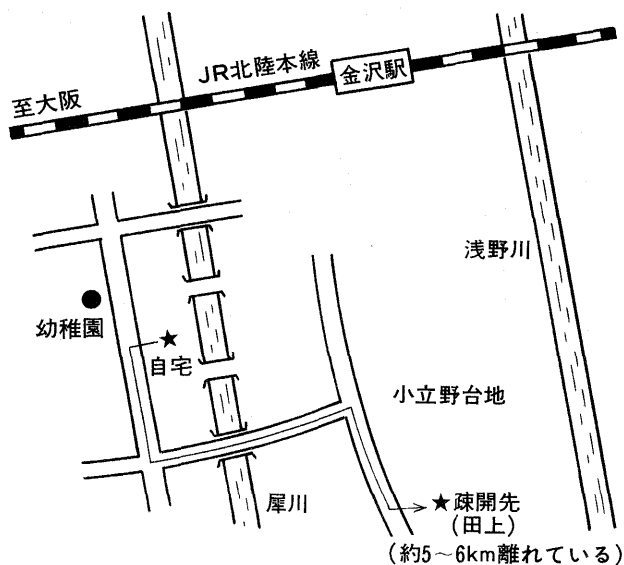
幼稚園までの私の主な日常生活空間は、家の前の通り―桜島三番丁―内と言っても良い。もちろん、後で述べるように「疎開」で遠出したことも兼六園に行つて記念撮影したこともあるが「日常」に限定すると桜島三番丁が主な生活空間になるのである。ここで、それを象徴する出来事、私の「虫歯事件」について思い出したい。当時、一九四一年（昭和16年）―一九四五年（同20年）頃

は、私の両親は満洲に出掛けていて、私は母方の祖父、祖母に育てられていた。いわゆる「おばあちゃん子」であった。そこで「甘く」育てられたと言って良い。以下述べるのは戦後間もないことと思うが、物資が不足している中で祖父はどこからともなく色々な物を手に入れた。その中にチョコレート等があった。私は、それらを食べて当然ながら虫歯になっていった。それが徐々に進行して遂に我慢が出来ない位に歯が痛くなった。どうしても我慢出来なくて「おじいちゃん、早く帰ってきて」と泣き叫んだらしい。家の中だけではおさまらずに裸足のまま外に飛び出して、寺町の電車道まで来てしまった。丁度、桜島三番丁の小路と寺町・電車道の境の所に立ち止まり、電車道に向かって叫んだ。日が西に傾いて真正面から私を照らしていたが、涙が目に溢れていたのも、その太陽は目の中で「ぐしゃぐしゃ」に崩れていた。痛みと鳴咽は中々止まらず、祖母や桜島角の魚屋のBさんが声をかけてくれても振り切っていつまでも泣きじゃくっていたのである。寺町の電車通りに出てし

まうと当時の私としては生活空間に境がなくて何処まで行ったら良いか分からない、だから日頃遊びに出歩いて良く分かっている桜島三番丁の町内が、当時少なくとも私の主な生活空間だったと思う。

「疎開」先へ歩き続ける

幼児期に桜島三番丁を越えて一番遠くへ行ったのは、恐らく「田上」地区へ「疎開」した時ではなかろうか。「田上」とは私の住んでいた寺町台地から一旦犀川へ下り、そこから小立野台地に上がって、更に上流に行ったところで当時、金沢市内から見て「田舎」であった。現在には金沢大学が移転キャンパスを持つ地区で金沢市街地の端となっている。私の家から疎開先まで五、六キロメートルほどはあるのではなかろうか。大人の足では何でもないが四歳の子供にしたら「大変な」距離である。もちろん、祖父、祖母は私を歩かせようとしたのではなく荷車に家財道具と一緒に乗せて運ぼうとしたのは当然であろう。しかし、私は結局、歩き通してしまったの



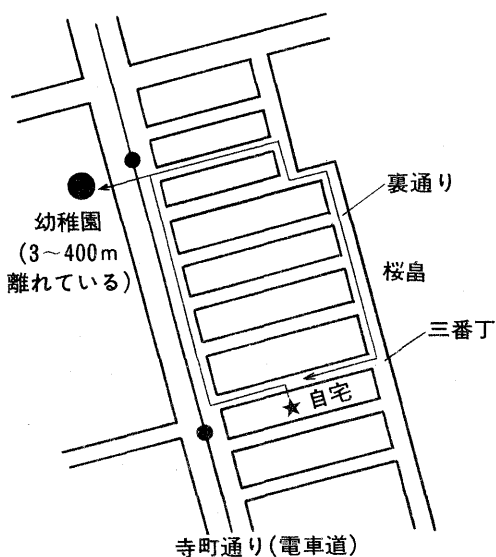
▲ 自宅(桜畠三番丁)と疎開先(田上)との位置関係

だ。向こうに着いたら親戚の人が「さすが男の子、強い、感心…」と言うし祖父なども自慢気であったが、自分としても最初からそのつもりはなかったが、間が悪いことに最初に祖父が「乗ったら」と言った時に周りに同

年代の知り合いの子供たちが見ていて「弱虫と思われる恥ずかしさ」から我慢した。そのうちに「乗せて」と言えなくなつて向こうに着いてしまったのだ。「恥の文化」の最初の実践的体験かな、と後に思った。

一年間、幼稚園に通う―主に電車道を通して―

私が一九四七年(昭和22年)四月より翌年の三月まで一年間通う幼稚園は寺町三丁目の電車通りに面した「金沢学園幼稚園」で曹洞宗の寺院経営であった。後に調べた記録によると私達は第17回修了生で一七名いたのである。通園路は、桜畠三番丁から寺町二丁目の電車道に出て端(当時は明確な歩道なし)を歩いて三丁目まで行き向こうに渡って幼稚園の門にいたった。そこは桜畠の町内の並びで言えば九番丁と十番丁の間にあった。子供の足で二十分ほどであろう。最初は祖母に付き添われて通ったのではあるまいか。慣れて来て一人あるいは友達と連れ立って行ったのでは、と思う。祖母からは「電車に気を付けて」と言われていた位で、自動車は今のよう



▲ 自宅と幼稚園(寺町三丁目)との位置関係

にびゅんびゅん走っている訳ではなくたまに通る珍しい存在だった。帰りは、電車通りに並ぶ店をのぞきながら、特に玩具屋の所で時間をとって道草しつつ戻ったと思う。たまには後でも述べる「裏通り」を通って帰った。この過程、経験を通じて寺町通りにある店の種類や数、位置が頭にしっかり入ったのではなからうか。又、

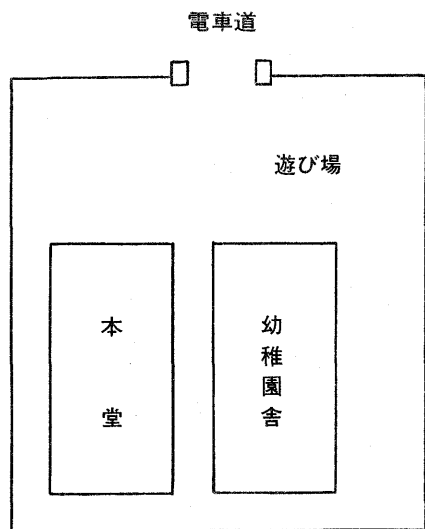
友達の家的位置もある程度分かっていた。

四月の「甘茶祭」

幼稚園が仏教系の経営だったので四月八日、入園して間もなく小さな仏像（お釈迦様）に甘茶をかける祭りがあった（と後の知識で分かった）。幼稚園の前庭に「お釈迦様」が置かれていたが順番にはっきりした意味も分からず面白いのではきりと背伸びをして甘茶をかけていた記憶がある。一年間、色々と年中行事があっただろうが、これがいわば最初だから良く覚えていたのだと思う。

天皇来沢と小旗振り

戦後すぐ天皇はいわゆる「人間宣言」を発して、全国行幸を始めたのである。金沢に現れたのは、記録によると一九四七年（昭和22年）秋の十月二十八日であった。兵舎跡地が引き上げ者住宅となっていた平和町や孤児収容施設の「亨生塾（きょうせいじゅく）」も訪問地とな



▲ 幼稚園舎と前庭のイメージ

り寺町通りも道筋に当たっていたので私達園児も日の丸の小旗を持たされて歓迎のため園の前の通りに動員され並べさせられた。やがて左手の広小路、大桜方面より一行がやって来た。多分、先頭はオープンカーのジープでアメリカ兵が独特の帽子をかぶって乗っていた。続いて天皇の車であるが、これはオープンカーではなかった、と記憶する。(どうもベンツの御料車であつたらしい)

全部で十台位続いていたのではなからうか。私達は、先生の合図で一斉に小旗を打ち振ったのであるが、私は後ろの方で背伸びをして振っていた。しかし、ふっと「どうしてこんなことをするのだらう」と思ったのではないか。しかし、これは後で記憶を呼び起こした時の後知恵感慨であるかもしれない。

積木をK君の頭にぶつける―裏道を逃げる―

幼稚園内では積木などを使って遊んでいた。その中で後々まで苦い思い出となった「事件」を記しておこう。それは、私が積木を投げて、それがたまたま寺町二丁目の文房具屋の息子K君の頭に当たったことである。別に彼に怨みがあるわけでもなく、たまたま投げたものが彼に当たっただけである。彼の頭からたらたらと血が流れた。私は、仰天してこともあろうに幼稚園を裸足で逃げ出したのである。寺町の電車通りを逃げればすぐ分かるし追いつかれると思って幼稚園正門向かいの桜島九番丁あたりから裏通りに回ってそこを通過して家に戻ったので

ある。裸足だし血相変えていたので祖母は「どうしたのや」と厳しく聞くも無言を押し通した。しかし、K君を怪我させたのは私、と分かっているのだから当然咎めを受けなくてはならない。やがて先生がやってきて家人に事情を説明し、私はこっぴどく叱られたのである。「K君の傷は大したことはなかったけれども、家に送り届けたから後で謝りに行きなさい」と先生から言われた。すぐ祖母とK君の家に謝りに行った。

鉄棒や砂遊び

外での遊びでは、鉄棒を使った遊びを覚えている。それは大変怖かったからでもある。幼稚園の前庭、すなわち寺町通りから入ったすぐの所が「おゆうぎ」の場となっていて鉄棒や砂場があったと思う。普通の鉄棒やジャングルの他に鉄の渡り梯子とも言えるものがあったが、これに登って渡る時の「落ちる」かもしれない恐怖は今もはつきり思い出す。

ここで私の体験ではないが娘の保育園時代に見聞した

話を挿入したい。娘が京大に勤めていた頃、その職場保育園である「朱い実保育園」に通っていた。その夏の人気遊びは「泥んこ遊び」で、子供たちが裸となつて園庭に出、水と泥でそれこそ「泥んこ」になるものだった。ある先生に聞くと「冷たい水と泥は子供達に人気があるが、何故かと言うと冷たい水や泥は子供達の肌を気持ち良く刺激する上に、形が不定型で変化し、子供達のイメージも刺激するから」のことだった。私は幼稚園時代、そんな遊びはしなかったが海浜で泳いだり遊んだ時の体験から「なるほど」と思ったものである。

卒園式の思い出

私は一九四八年（昭和23年）三月「金沢学園幼稚園」を卒園した。その式の時、皆で写した記念写真があるが、それを見ながら思い出すことがある。これも「恥ずかしい」部類に入ることなのだが……。それは、私だけがネクタイをしていることである。時代が時代だから皆普通服で、女の子で着物を着ている子も数人にすぎな

い。私は、何故か「小紳士然」とネクタイを着用させられた。当然、「恥ずかしくて」しかたがない。その結果、写真でもはつきりするが、ネクタイを少し横にずらせて写真に写らないように工夫している。そのしぐさものはつきり記憶している。

おわりに―幼児空間生活と生活空間―

以上で私の幼稚園までの空間生活体験と生活空間について思い出すいくつかを述べたが、最後に「まとめ」をしておきたい。ここに思い出しを述べた体験は、後からみると「怖かったこと」「痛かったこと」「恥ずかしかったこと」などであり、普通の平凡な日常の体験は余り良く思い出さない。それは「記憶のメカニズム」から言っても当然と言える。それらは言わば幼児にとっては「強い」刺激と言って良い。こういう「刺激」を、意識して与えること経験させることは難しいし、必ずしも良いとは言えないが、体験からの私の気持ちとしては「出来るだけメリハリの効いた生活体験をさせる」精神が必要

要ではないか、ということである。

次に幼児のためにのみ生活空間を計画することは特別な領域を除いて難しいが、これ又、精神として言えることは第一に、幼児の目線に下りて大人も一度考え計画してみたかどうか、ということ。第二に、余り突っ拍子な「幼稚園」ではなく住まいの延長としてすぐにでも溶け込める空間が良いのではないか、ということ。(余りに独創的な形態の建築をつくったら子供が萎縮したという話を聞いたことがある) 第三に、「幼稚園」は大人が設計してつくるのであるが「未だはつきり物言えぬ」子供の反応を見ながら「共に創造してゆく」精神が大切ではないか、ということ。そして最後に、これは町づくりのことであるが、表通りも裏通りもあり、店も空き地もあり、といった「子供達が楽しく道草の出来る町づくり」が必要ではないか、ということである。

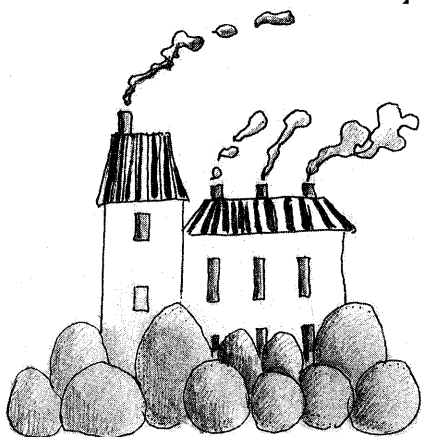
(奈良女子大学家政学部住居学科)

「住まい」のイメージ (2)

子どもの夢の家

「こんなおうちにすみたいな」

村松 明子



本田和子先生のご指導のもとに書いたお茶の水女子大学児童学科平成三年度卒業論文『子どもの夢の家ー児童文化財をてがかりにー』の最終章で、私は、子どもの描いた絵をもとに、かれらが憧れる住まい像について考えた。その「子どもの夢の家」は、特徴別に四つに分けられて興味深かったので、ご紹介したい。

絵を描いてくれたのは、八歳から十二歳までの小学生二十人（男八、女十二、平成二年一学期当時）である。描画をお願いするにあたってのこちらからの指示は、

「『こんなおうち（おへや）にすみたいな』という題で、自由に絵をかくてくさい」のみにして、描く側の住まいへのイメージを自由な方向へのばしてもらうようにしたつもりである。

a. 家タイプ

家の外観の様子を描いてくれたものは三点あった。どれも森や林を背景にした、赤い屋根と煙突があるれんが造りの山小屋風のもの。窓には白やピンク色のカーテン

◀ 図1 家タイプ



が下がり、花の咲く庭には池があり、木陰で読書する少女の姿やブランコ等も描かれている。春夏秋冬それぞれの花がいちどきに咲き乱れている庭もあった。(図1)

山小屋風というより、別荘風といったほうがよいだろうか。家そのものよりむしろ背景の森や庭に重きがおかれて描きこまれているように思った。ハイジやアンなどの少女小説の住まいや、あるいは外国のお伽話の“うち”を連想させる。自然の美しい景観の中という立地条件と、それにとけこんでひっそりと立っている伝統的な家という情景である。

b. おへやタイプ

いわゆる少女趣味なへかわいいへやを、六人の女の子(全員六年生)が描いていた。出窓のカーテン、ベッドカバーや枕はみな暖色でフリルがあしらわれ、ケーキと紅茶をいただくための小さなテーブルと椅子のある、ゆったりとした洋間、という典型的なものだ(図2)。

他に暖炉・クッション・花・ソファ・額縁などが多く見られる。アンやローラの時代を彷彿させる、木や布で作

られた調度にかこまれた部屋。うつわ（部屋）よりも、なかに置くモノの選択と組み合わせに重きがおかれている。

すなわち、以上 a・b 二項の要素をあわせると、“花いっぱい”の庭や自然にかこまれた、かわいいモノばかりのおへや”という、住まい像がうかびあがってくる。それは少女小説等の住まいから出発して、大人になっても一つのスタイルとして受け継がれていく、住まいの理想像の一つであるようだ。余計なお世話だが、そんなへかわいいV住まいにはやはりサラリーマンのお父さんが共存する余地はなく、夢見る少女が独りで暮らす場にしかなりえないといえよう。

c. 間取りタイプ

高学年の男女四人が、住宅販売のチラシによくある間取り図のような絵を描いていた。大きな四角い枠の中をいくつもの個室に区切って、玄関・台所・風呂・家族員それぞれの部屋というふうに、用途が書き込まれている（図3）。二階・三階建てのものが多く、広くとった庭の

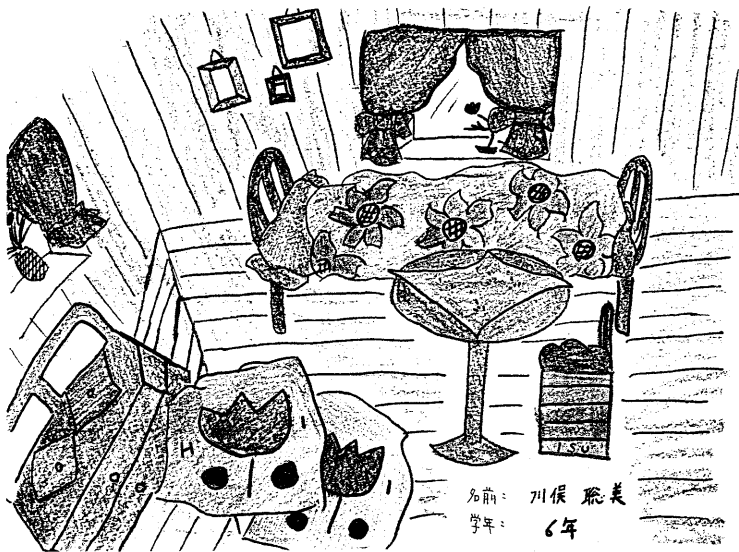
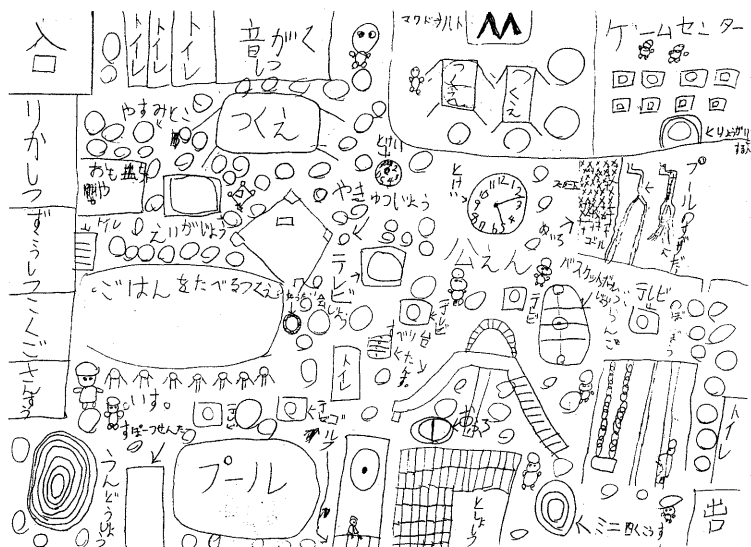


図2 おへやタイプ

図 4

お楽しみとりこみタイプ



を描き足している(図4)。庭に温泉・プールや野球場や、はてはマクドナルドのあるもので、実にたくさん
の設備が描き込まれていて、見ていても飽きない。住ま
いとスポーツセンター・学校・遊園地などがドッキング
してしまったようなものだ。すべり台やおもちゃ屋やバ
スケットボール場やミニ四駆コースなど、あふれんば
かりの設備の隙間をぬうようにして、筆筒や食卓が描かれ
ているものもあり、ひとつひとつに目を移していくのが
楽しい。およそ生活感からはほど遠い住まいだが、彼ら
にとつての楽しみのありつたけをそのまま取り込んだ、
まさに夢の住まいなのであろう。家に取り込むというこ
とは、所有するということである。すなわち、いつでも
好きな時に、好きなだけ(使用料金を払うこともなく、
混雑することもなく)遊べることの愉しみだ。ファミコ
ンをはじめとして、ゲームセンターでしか遊ぶことので
きなかったいわゆる「アーケードもの」といった玩具
(モグラたたき・クレーンなど)がつきつきと商品化さ
れている風潮と重ねることでもできよう。

残り二点は、「飛ぶ家」であった。ピンク色の外壁に星のマークが散りばめられて雲の上に浮かんだ家を紙いっばいに描いたものと、「飛ぶ島」なるもののうえに建てられた二階家やマンション。後者には、下界（池袋）の風景がことこまかに描きこまれている。描いてくれた子どもは、池袋沿線のベッドタウンに住んでいるらしい。「長いこと電車に乗ったりせずに、家に居ながら、好きな所へ行けたらいいな」という願いを、このようなかたちでかなえてみたいのだろう。

以上、子どもたちの「夢の家」を四タイプに分けて紹介し思うことを述べてみたが、どの絵からも共通して感じられるのは、ありたき住まいへのイメージがたいへん具体的で、「自分の身のまわりを思う通りにしてみたい」というこどもの想像の世界が、見るものをぞくぞくさせるような興奮と楽しさを伴った絵と言葉で表現されていることである。部屋やモノの様子がこまごまと描きこまれていて画面からあふれんばかりのエネルギーは、生

活の場である住まいへの愛着とそれゆえのさまざまな願望と遊び心にささえられているのではないだろうか。

住まいは人間にとって日常に一番基本的な空間であるといえよう。それだけに愛着や関心は大きいし、また日常的であるがゆえに、ほんの少しでもその位置からはずれると、たちまち夢や空想の世界へと浮遊しうるのはないだろうか。アミューズメントとりこみタイプの家はもちろん、おもうぞんぶん少女趣味な家や、「間取り型」のように部屋のたくさんある家なども、子どもにとっては（大人にとっても）ながめ想像して愉しむ「夢の家」なのだと思う。

注 延藤安弘『こんな家に住みたいナ』（晶文社、一九八三、p. 22）

（玩具メーカー勤務）

傘の家から

宮里 暁美

小雨のバラつく園庭を、傘をさして、ピチャピチャと歩いていた子ども達。一人が立ちどまり、ふっとしゃがみこむ。

雨にぬれた園庭に、小さな傘、ひとつ。

先を歩いていた友達がふり返る。私も、とも言うように。かけ戻り、一緒にしゃがみこむ。

雨にぬれた園庭に、小さな傘がいくつも重なって、色とりどりの、こんもりした屋根ができる。小さな家ができる。

傘を使つての家作り。誰でも一度は、体験したこと

ある、この遊びの中に、家作りの魅力や要素が、たくさんつまっている。

〈屋根〉

ゴザを一枚敷いただけ、積木をまわりにならべただけでも、それは、立派な家。外に行く時は「いってきます」と言い、帰ってきた時には「ただいま!」と言う。そして、くつまでそろえたりする。(写真①②)

家は、どんな横にひろがり、部屋数が増え近所づきあいまで始まる。家の清掃も、念入りに行う。(写真③)



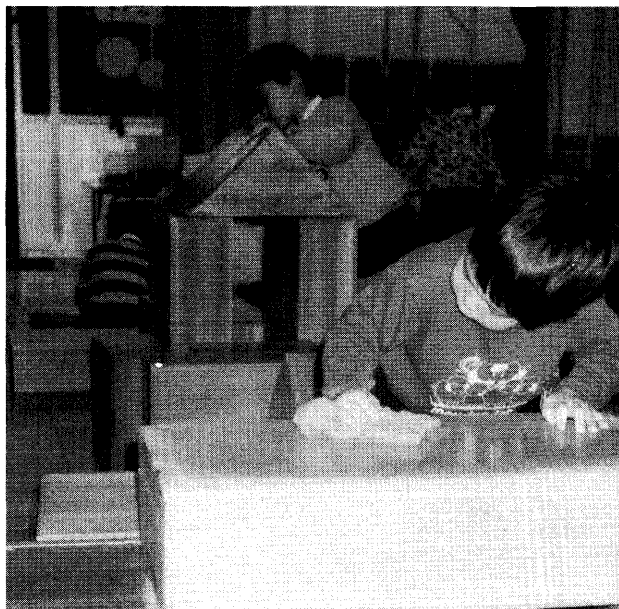


◀ 写真① 「ただいまー!」



▶ 写真② 「おおきな家でしょ」

写真③ 「きれいにするんだ」



何の不足もなく、そうやって遊んでいるうちに、誰かが、ポツリ、と言う。

「屋根があつたほうがいいよ。」

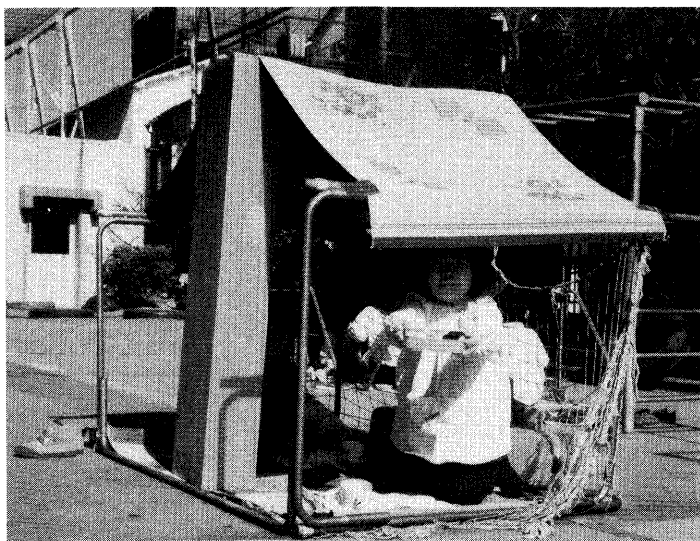
その瞬間、子どもたちの頭の中には、どんなイメージがうかんでいるのだろうか。

布やごさは、手近な物で屋根になりやすい。それでも、かぶせた、と思うとずれてしまったり、たるんでしまったりする。私も知恵をしぼりながら、いろいろな工夫する。(写真④⑤)

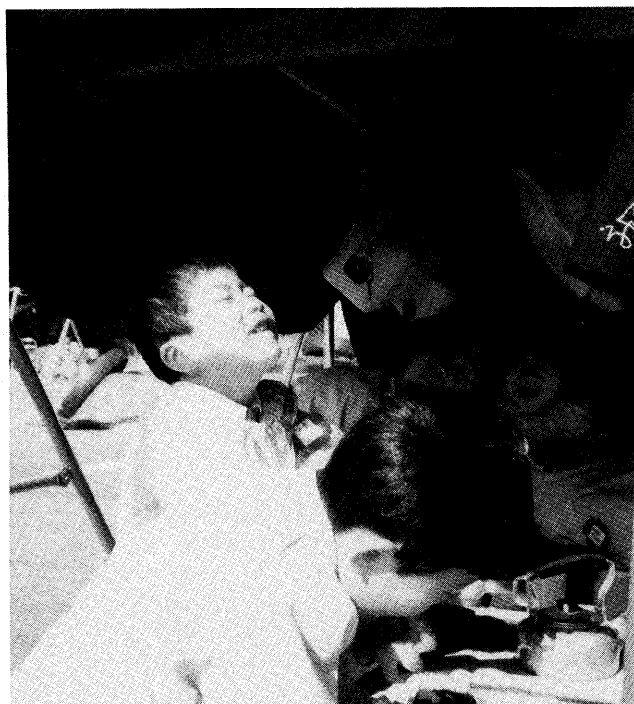
屋根ができると、家は、屋根の下に限定される。それは、狭さとかわれやすさをもたらす。「屋根」という夢を実現したために、少なからず不自由さをひきうけなくてはならなくなるのだが、子ども達は、そんなことを気にかけない。家を作りあげた、という満足感でいっぱいである。

屋根を作る、ということは、簡単なことではない。一本の傘は、たやすくそれを実現したが、傘の柄にさえぎられ動きにくかったりなど不自由さも格別だった。

それでもやっぱり、屋根がほしくなる。それは、他と区切られた、「私の(達)の空間」を、深く意識させら



◀ 写真④
 自分達の家で、お弁当をたべよう。
 「いただきます」



▶ 写真⑤
 「いい家でしょー!」

れるからだと思う。

〈光・暗さ〉

傘の家の中は、明るい水色や黄色、赤色につつまれる。光をうけて、傘の色がはえるのである。ゴザや暗幕だと、逆に薄暗くなる。光はさえぎられ、暗さがおとずれる。時には、懐中電灯を持ちこんだりもする。

自分達の家を作り、空間として区切られた時、光もまた特殊なものとなってくる。薄暗かったり不思議な色をしていたり……。そのような空間全体の印象は、子ども達の心の中に深く入りこんでいくと思う。

すっぽりと包まれたような家の中で、たつぷりと遊び、外へ出た時の、あの落差。光も、色も、音も、凝縮していたものが、サーッと散っていくように、ひろがっていく、薄まっていく。それらを瞬時に味わいながら、子どもは、思わず、

「あーあ」

と、のびをしたりする。子ども達は、こうやって、特殊

な空間と、いつもの空間を、行ったり来たりしている。植物園を散歩していた時、同様の体験をしたことがある。

子ども達を連れて、木々の間を歩いていた。穏かに晴れわたった春の一日。陽の当たるところは、明るかったが、大きな木が枝をのびし、空をおおいつくしているような一角は、薄暗かった。明るいところから暗いところに入り、木々の間を、うねうねしばらく歩きようやく、又明るいところに出た。その時、ほっとしたような空気が流れ、

「ここ、はじめてのところでしょ。」

「もう、夕方？」

という声がかきこえた。

これもまた、行ったり来たりの体験なのだろうと思う。

実際には、ほんの短い時間だったのに、とても長く感じる。今は、いつだろう、と一瞬とまどう。そんな感覚が、「戻ってきた」時の、子どもの中にある。

自分（達）だけの家の中で、他とは違う、「私（達）の時間」を、味わっているのだと思う。

〈狭さ〉

「ねえ、○○ちゃん傘かして。」

「ねえ、△△君もかしてね。」

傘を使って、もっと大きな家を作ろうと考えた子ども達が、他の友達によびかけて傘を集めまわっている。

七、八本集まったので、それを開き、くつつけたり、上からのせたりして、今までよりは、ずっと大きな家を作った。

「入れて……」

「入れて……」

と、次々に入りたい子どもがやってくる。

はじめの内は、うけ入れていたけれど、とうとう満員になってしまった。

「どうして入れてくれないのよ。」

「だって、もう入れないんだもん。」

「いいもん、入っちゃう。」

そう言って、無理矢理入った途端、傘は、バラバラ……。

子どもの作る家は狭い。

狭いのが、魅力でもある。体をくつつけて、しゃがみこんで、息づかいを感じ合って。だから、狭いけれど、ずいぶんたくさんの人が入ることができる。狭い中で、ゆずり合い何となく心を通わせ合って遊ぶことができる。

それでも、限界はある。これ以上は、入れない、という限界がある。それは、物理的な限界だけではない。

こわれてしまった傘の家。もう一つ傘をもってきて広くすることもできる。けれども、子ども達の遊びをみていると、ちょうどいい狭さがあるように思える。

息づかいが感じとれ、「私達」を味わい合える狭さ。それを、場合により違うように感じとりながら、作っていつているように思う。

だから、傘の家を、もうこれ以上は広くしようとはせ

写真⑥ 「この下が、ひみつのかくれ場所だよ」



ずに、新しく、もう一軒、作るようにすすめてみる。一つの傘で。

傘の家をもととして、子どもにとっての家作りについて、いろいろと考えてきた。横にひろがっていく家作りから、屋根ができ、場が限定された時、今度は、家作りは、縦にひろがっていく。

地下室（ほら穴）や、二階建てである。（写真⑥）その中で、子ども達は、先に述べた狭さや、暗さを味わいながら、さらに、上下で暮らしている感覚を楽しんでいるのだろう。

子ども達が味わっているもの、感じとっていること、それらを、もっともっと知っていきたいと思っている。

（東京都文京区立第一幼稚園）

保育者養成の今日的課題 (6)

～ 少子化傾向を中心として～ 動物実験の試み

前田 あけみ

一、はじめに

少子化がもたらすであろう課題は、様々であるが、特に危惧されることは、多様な関係体験がなされにくくなること、自己中心的なあり方から、自己を相対化し、同時に様々な存在をかけがえのないものとして捉えることの体験が少なくなることであろう。このような体験は、その関係の作り方の本質を捉えていくならば、様々な活動によって、充分体験されうると考えられる。その可能性の一つとして、動物との多様な関係体験があると、筆者は考えている。

当初この実習は、純粹に動物に関する知識や技術を深め、また、子どもが動物とかかわる際の援助者になれるようにと行うことを目的にして、保育内容総論の特別演習として行った。ところが、ヘビに触れるなどの体験は、その予測を越えて、自分の中の偏見に気付いたり、また、動物を抱くためには、その動物の性質を知り、それに応じて抱かなくてはならず学生に相手のあり方に応じてかかわる「補助自我的な振る舞い」を育てることとなった。さらに、様々な動物の人間とは異なる形態や性質に触れ、人間も動物の一種類であると言うことを改め

て発見している。この動物実習が、単なる知識や技術の獲得だけでなく、多様な関係体験をもたらし、自分（人間）と言う存在を、客観化・相対化する体験をもたらすことがわかって来た。

そこで、このような実習を保育者養成に取り入れることは、保育者としての資質を高めるのに役立つのではないかと考え始めている。しかしながら、今の段階は、まだ模索の段階であり、あくまでも途中経過である。（けれども、実感として学生に大きな変化をもたらしたと感ぜられるし、学生自身も多くは、「動物実習が印象的であった。機会があったら、もう一度行きたい」と述べている）

二、動物実習の概要

保育内容総論の特別演習として、月に一度の割りに土曜日の午前中に三回行った。

対象となったのは、富山大学教育学部幼稚園教員養成課程二十六名の学生（全員女子）。一回めは、富山市ファミリーパークで、学生が、三人の飼育係から、動物の扱い方（かかわり方）を学び、実際に抱いてみた。二回

めは、ファミリーパークで、市内の保育所の子ども達三十名に、今度は、学生が先回の飼育係の役を取り、動物との出会い、触れ合いの活動を指導した。三回めは、富山大学で、実習についてのディスカッションを行った。

富山市ファミリーパークは、富山市郊外の呉羽丘陵西部に位置する。ゾウやパンダなどの珍獣はいないが、ファミリーパーク内の子ども動物園では、いつでもアヒルやヒヨコを抱くことができる。このような施設の協力で、この動物実習は、実現している。

この実習に関しての養成者としてのねらいは、①動物に対する理解や親しみを深め、飼育に関する知識・技能を高めること。動物一般に対しては、動物の存在を認め、それなりの付き合い方の有ることの原体験をする。特定の動物に対しては、具体的な知識・技能を身につける。②子どもと動物のかかわりを促進する媒介者としての、保育実践力を高める、である。しかし先にも述べたように、そのねらいを越えて、多様な関係体験、偏見などの価値観について発見したり、考えたり、人間（自己存在）を相対化して捉えるなどの豊かな体験が成立している。

ファミリーパーク側のねらいとしては、①将来の保育者に対する動物についての知識・取り扱いなどの普及
②子どもと動物のかかわりを見学し・体験し、動物の持つ価値を改めて考える場を提供する。③「心豊かな子ども達を育てる」ことを目的にした機関は、少なくない。家庭・学校・地域など、子どものあらゆる日常生活でのその目的が達せられるには、諸機関のネットワーク化が有効であろうが、まだ実例は少ない。今回は、その一つの試みとして、学校教育機関との共同研究を行うというものである。

三、実習の実際

実習の実際について、特に一回めを中心に述べる。
一回め、一九九〇年五月二十六日土曜、九時から十二時までパーク内の子ども動物園で、動物について、簡単な特性や抱き方の説明を、飼育係から受け、その後実際に抱いたり、触れたりし、さらに子どもが、抱く際の援助についても、具体的なアドバイスを受ける。

例えば、抱き方のポイントとしては、
ウサギは、尻のところに手を当て、人間の胸とウサギ

の胸とが、向き合うようにし、足は人間の胸につくようにすると安定できる。子どもには「ウサギさんのお中と、ぼくのお中がくっつくようにね」というように言って援助するとよい。

ヒヨコは、両手でそっとすくうように、手のひらの中に入れる。抱き終わって地面に戻す時は、地面に両手を近づけて、静かに両手を開く。立ったまま、両手をぱっと開くと、ヒヨコは落下して、足を怪我したりすることがある。一mぐらいの高さでも、体長一〇cmのヒヨコには、十倍の高さであり、目も眩むくらいである。子どもには、「お水をすくうようにね」となるべく座って、抱くようにと指導するとよい。

アヒルはおっとりしているように見えるが、意外に逃げ足が早い。アヒルの後ろの方から胴の部分をさっと両手で抱え、首を軽く押さえて胸に抱く。人間がもたもたしていると、アヒルは襲われると思って羽根をバタバタさせる。バタバタさせて動いている時には、抱けず、羽根が体についている時に、すばやく抱く。子どもには、保育者が捕まえて抱いてから、触らせたり、抱かせたりする。

このように、動物を抱くという体験は、相手の特性に応じて、こちらのふるまい方を変えろという体験、自分本位では、決して成功しない体験が成立する活動である。

この実習で触れるように用意された動物は、アヒル・ウサギ・ヤギ・ポニー・ヒツジ・ハツカネズミ・モルモット・ハムスター・チャボ・ガチョウ・セキセイインコ・ウズラ・カメ・ヘビ・カエル・オタマジャクシ・キンギョ・ドジョウ・サワガニ。

この一回めの、最も象徴的な出来事は、「ヘビを抱く」ということであつた。このことは、初めは、筆者の個人的な興味から始まつた。飼育係の山本氏が「ヘビは、ヌルヌルしておらず、サラッとしている。アオダイショウは、とてもおとなしくてかわいい。ヘビに対して、みんな知らないで、偏見を持っている。ヘビの方が迷惑している」と言われ、「どうです、持ってみませんか。」としかけられたのが、きっかけである。筆者は、ヘビなど、それまでは、見ると吐き気さえ感じていた。ところが、それは偏見と言われ、日頃から、自分の内なる偏見を乗り越えることをモットーとして生きてきたの

で、ヘビにも挑戦することとする。学生達も「前田先生が触ったら、触る」と言うので、引くに引けなくなつたところがある。当日、いよいよ最後にヘビに触れる活動になると、心臓は高鳴り、飼育係に体長一・三mのアオダイショウが手渡されて、ヘビが筆者の腕にからみついて来た時は、もうすぐさま放してしまいたい衝動にかられた。目をつぶって耐えている。ヘビはゆっくり緩やかに動き、ひんやりとしてさらさらした感触が感じられた。

そして、そつと目を開けると、グレイがかったモザイ模様のおろこが美しかった。ヘビは、心地よく動いている。「サラッとして気持ちいいし、とても綺麗」と言葉を発すると初めは遠のいていた学生も寄つて来る。一番初めは、過去に持つたことのある学生が抱き、そのヘビに他の学生が見たり、触れたりし、そのうちに自分も持つてみるという学生が次々に現れる。そして、次々に抱かないまでも、撫でたり、指で触れたりして、最後には一名を除いて、殆ど学生が何らかの形で触れている。触れた印象としては、学生F「絶対に触れないと思つていたのに、実際すつと触れて、後にぬめりがなく、そんなに怖くはなかつた」学生Y「意外なことに触つてみる

と、サラッとしていて冷たく、思ったほど気持ち悪いものではなかった」学生O「へびを触って、握ってみると、動かたずに、体の筋肉が動くのを感じて気持ち悪かったが、へびもやはり生きているんだと感じた」学生A「初めて触った。とても、感激した。でも一人だったら、きっと触れていないと思う」などと述べている。

事後アンケートの中の「一番印象に残った動物は、何ですか」と言う問いに対し、へびが二十六名中十六名、ボニー二名、ハツカネズミ一名、ウサギ一名、ヤギ四名、無回答二名となっている。また、「あなたにとって、今日の一番の収穫は、何だったでしょうか。自由に述べて下さい」という問いに対して、ある学生Mは、次のように述べている。「楽しく動物と触れ合うことができたこと。動物を近くに感じられるようになりました。

正直なところ動物は苦手な方で、こんなに触れられるとは思っていませんでした。今日の実習は、私にとって

は、大変化をおこした実のあるものだったと思います。へびなどの動物に対する偏見が多かったことが、改めてわかりました。動物は何も悪くないのに、怖いものだと決めつけてかかっていたのです。動物に対する接し方

も、抱き方などがわかれば、動物だっておとなしくしているし、怖くないのです。動物だって人間と同じ生き物で不安な時も、機嫌が悪い時もあるということもわかってあげなければ（動物の立場に立って考えなければ）動物とうまくつきあっていけないと思いました。」学生Dは、「実際に触れてみるのが、いかに大切なことなのか、よくわかった。私にとって、ほとんどが、初めて触れる動物だったのだが、『触らず嫌い』という部分があったかもしれない。動物に触れることによって、その動物を身近に感ずることができ、また他に動物にもそれぞれ実際の温かさや呼吸や動き、リズムなどを感じることができるということに意味があるのではないかと思います」と述べている。

二回めは、六月二十六日、富山市内の保育所の幼児三十名をファミリーパークに招き、今度は学生が飼育係のように、幼児が動物とかかわり合う援助をしたり、保育者（学生）と子どもとかかわりを観察したりする。対象となった動物は、Aコーナー…アヒル、ガチョウ、Bコーナー…ウサギ、モルモット、ヒヨコ、ハムスター、Cコーナー…子ヤギ

この実習に先立ち、筆者が出した指示は、次のようなものである。

①これらの動物との触れ合いを約二十分で。なるべく多くの動物と触れ合うように働きかけるが、あくまでも子どもの主体性を尊重すること。学生は二人ペアで、実習と観察を前半グループ二十分と後半のグループ二十分で交代すること。②事前にそれぞれの動物を子どもが、抱いたり触れたりできるように、学生は自ら抱いて子どもに渡せるように、ペアで練習すること。(学生は、アヒルを抱くの苦労したようである)

③子どもが、興味をもったならば、適切な発見ができるようなら、事前に学生が動物の特色などをペアでまとめおくこと。

実際の実習は、ウサギを見ると一目散にかけていく子ども、近づきたいけれどしりごみする子、持っている餌をヤギが食べに来たり、手をなめられたりして、びっくりしたり、怖がって泣き出したりする子など様々であった。また、ウォーミングアップの活動を三十分くらいとったが、初対面で、動物より、人との出会いに課題が成立してしまい、今後の検討事項として残っている。

三回めは、七月二十一日 富山大学教育学部第一講義

室において、ファミリーパークの飼育係三人を招いて、ディスカッション。初めに二回の実習で発見したり、学んだことを中心に、全員が三分間スピーチをする。そのあと質疑応答を含めて、フリーディスカッションをする。

ディスカッションのテープ起こしの資料より。学生S「(実習前で) 子ども達と生に接したのは、初めてみたいなものなのでですけど、まず思ったのは、子どもと私達みたいな大人では、大きさの認識というのがものすごく違うんだなと思いました。私達は、例えば、子ヤギとかアヒルとか見て、かわいいと思うけど、子ヤギとかアヒルとかは考えてみると、子どもとほとんど同じ大きさで、近づいて来たら後ずさりして逃げる子がいって、私達が、どんなに可愛いと思っても、子どもにとっては、怖いものもあるのだなと思いました。初めて会った大人達と動物園をぞろぞろ動くという特異な環境で、子ども達にとっても、迷惑かなという引け目があって、積極的にあまり働きかけられなくて、その点が反省点です。私自身、この実習でどう変わったかと言うことについては、私も最初、ヘビが気持ち悪いとか、これは、絶対に触れないと思っていたのですが、実際に行ったら触られ

たんですね。その時は、まず先生（筆者）が、悲鳴をあげながらも触って、それから他の人も次々と触っているのを見て、これは触ってもだいじょうぶなものなのだと、思っ
て勇気を振るい起こして触ることができました。それについて後から思ったのですが、動物に対する怖さとか先入観とか偏見とか言うものをぬぐい去るには、先生の働きかけとか回りの雰囲気が非常に大事だと感じました。とにかく、私は、動物を見ることがあっても触れることが無かったので、いろんな動物に触れたと言う意味で貴重な体験でした」と述べている。

四、まとめに代えて

「動物」と言う言葉を聞いて、あなたは何を連想しますかという問いに対して、事前のアンケートでは、「かわいい」「ふわふわしたもの」という抽象的で、ある限られた動物をイメージしているのに対して、実習後では、「人間と同じまたは仲間」と言うような内容になったものが八名、「温かいもの」と言うような内容になったものが四名が、特徴的である。事前は、自己と動物が切り離され捉えられているが、事後は、動物と人間が

触れ合い、共に存在する状況において、成立してくるイメージが捉えられている。

好きな動物、嫌いな動物を上位三位答える問いに関しては、ウサギが一位に浮上したものの八名、ヘビが嫌いな動物から消えたものの八名（事前で嫌いなものに挙げているもの十三名。事後も嫌いなものとして残ったものの五名であったが、それぞれ少しは、よくなったと答えている）。

動物の好き嫌いは、かなり漠然としたイメージに左右されており、実際に触れ合うことによって、自己の内なる漠然としたイメージや偏見を崩すことが可能であると示唆された。

このように、動物実習は、（自己を相対化して）様々な動物をかけがえのない存在として認めて、かわり合うことが、喜びとして成立する。そしてその喜びから、どのようにかわかってふるまうことが、その喜びを作り出すかが自覚されるようになる。さらには自らが、そのかわりを作り出せる人として育っていく。このような体験が、子どもにおいて成立するならば、少子化によってもたらされる課題を、ある意味で克服できるのではな

いだろうか。そして、そのような体験が子どもにおいて成立するためには、保育者自身においてもそのような体験が成立することが不可欠であろう。今回の動物実習は、その体験の成立する実習として位置づけられる。

五、結びに代えて

少子化の問題は、さまざまな生活や体験に変化を及ぼすであろう。しかし、基本的な関係体験が、大切に展開されるように配慮されるならば、つまり、質の配慮によって、数のもたらす課題は、ある程度は解決するのではないだろうか。すなわち、子どもも保育者もそれぞれが、かけがえない人として、動植物、自然物、文化財などとかかわりあいながら生きている。このようににかかわりあって生きることが体験され、そのことが喜びとして育つ。そして子どもにおいても、保育者においても、その喜びから、かかわりあっている自己に気付き、自らがどのようなにかかわってふるまうことで、喜びが育つかが自覚されていくようになる。自己とかかわり、人とかかわり、物とかかわりあって、変化し、発展する経験を通して、変化し発展する契機を、自らつくり出していか

る人として育つのである。このような事柄が、大切にされ、関係発展を見通した保育者のかかわりがあれば、少子化の状況にあって、子どもはむしろ質の高い経験を積むことさえ可能になるであろう。そして、保育者養成にかかわる筆者には、そのことが可能となる「子どもが自己や人や物とかかわり合いながら自己形成する子どもの発達に関する理解」を深め、一方で「関係発展を担う者として子どもの発達を促すかかわり方となる視点（理論）と実践力」の養成が求められており、これまで述べてきた、チーム観察法、心理劇法、動物実習は、筆者なりの一つの模索である。

協力 富山市ファミリーパーク（山本茂行、大坪洋美、石原祐司）

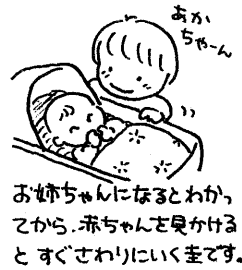
（富山大学教育学部）

*** ある日の育児日記から ***
 *** (11) 佐藤 和代 ***



今、二人目の子どもがお腹の中にいます。つわりがひどくて、圭とあまり遊べなくなってしまうしました。こうなると、お父さんの出番が増えます。今のところ、夕食後の遊びとおふろ、それに寝かしつけるのがお父さんの役目です。私が圭を寝かしつけるときは、絵本を読んだあと、明かりを消して、お話（主に昔話）をひとつかふたつ……というのがお決まりコース。でも、お父さんは「おはなしして」と言われたとき、「今日は保育園で何したの？」と、お話ならぬ、「会話を始めたのです」。

久しぶりに私とふとんに入った日、昔話を始めたら、圭にさえぎられました。「保育園のお話がいい！」それで私も、「誰と遊んだの？」「かなちゃん」「何して？」「ブロック」などと、やりとりしました。二人でこんな時間を過ごしてみても気づいたのは圭はもう、一方的に聞くだけではものたりないんだ、お話したいことがいっぱいあるんだ、ということ。ちょっと役割を交代してみたおかげで、圭の成長をまたひとつ発見！



これからは、あまり圭の世話を独占しないことにしましょう。でないと、成長に気づかず、ずっと赤ちゃん扱いしてしまいそう。だからお父さん、よろしくね。

オ ラ ン ダ 便 り (2)

向 山 陽 子



お月さまが、カーテン越しに輝いています。朝七時、そろそろ起きなくては……今朝は晴れ、凍ってるかな？凍っていると、車のガラスの氷かきの時間だけ、早く起きなくてはなりません。部屋にヒーターが入りはじめました。室内は快適なので寒さのために起きられないという事は全くなく、もう少し、トロトロと夢見心地を楽しみたいだけ。

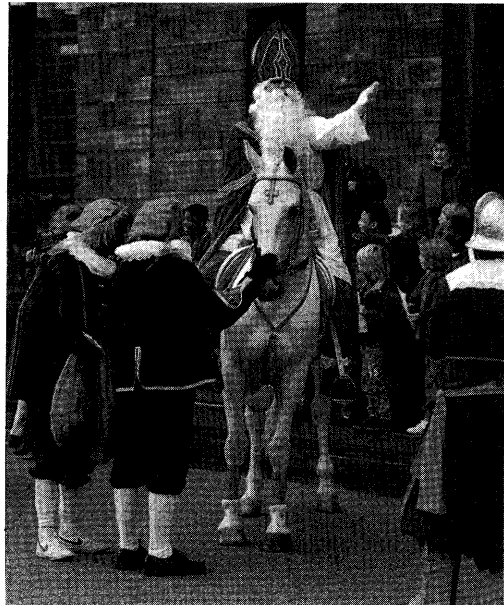
“あっそうだ、今朝は、みづきが早く学校へ行って、友達と宿題をするって言ってたっけ。お弁当のごはんも炊かなくては……今日こそ原稿を仕上げるぞ！（この原稿！！）今週は、学校の最後の週で、子ども達の劇や音楽の会（夜七時～八時半）があり、先生方へのクリスマス

プレゼントを用意したり……“忙しいぞ”自分を奮い立たせて、七時四十分、やっとベッドから脱け出しました。

ヘッドライトの流れに合流して、車を走らせ、娘を学校に送った帰り、地平線がしらじらと明けてきます。時間は八時五十分。

オランダに来て、早くも一年八か月。神戸生まれ、東京育ちの私は、オランダの冬の長さ、曇り空の毎日、そして夜の短い夏に、“青空、星空欠乏症”になるのではと心配でした。それなのに、二度目の冬を迎えたこの頃は、北海から吹きつける風、どんよりとしたヨーロッパの冬空、街を控え目に飾るイルミネーションの美しさが大好きになってしまいました。（そう、毎日が天使が降りてきそうな空……わかるかな……ユーミン……なのです。）

季節は、シント・ニコラウスの日、十二月五日（注1）を終えて、街はクリスマスの準備に入り、家々も、ツリーを飾り、おちつきのある、それぞれの飾りつけを、窓から眺められる楽しい時です。又、クリスマス



▶ アムステル・ダムに到着したシント・ニコラウスと
ブラック・ビート

カード、クリスマスプレゼントの準備と、一年中で最も忙しい時期でもあります。

イギリス人の友達は、クリスマス休暇は、おみやげを持って国に帰り、親類への挨拶回りで、忙しいばかりとこぼしていました。「クリスマス・シンдрロームって

知っている？」と、アメリカ人の友達が教えてくれました。クリスマスの季節には、二つのタイプのカウンセリングの患者が増えるそうです。一つは、主婦層で、この季節の忙しさからストレスがたまるとのようです。『良き主婦像』というのが根強くあるようです。もう一つは、さまざまな理由から家庭を持たない独り身の人達が、この時期、寂しさから、精神的に不安定になるのだそうです。

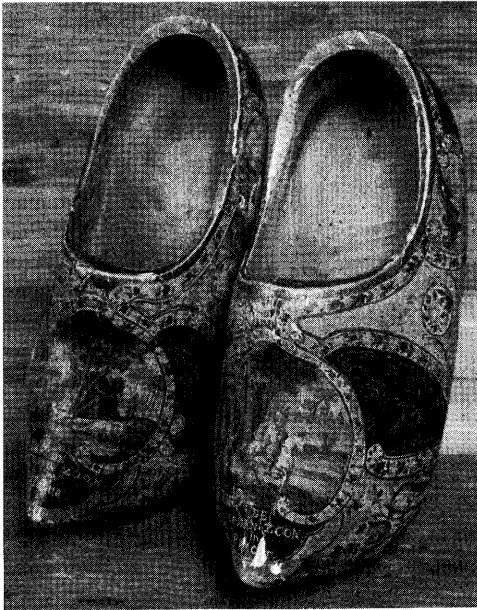
私の住んでいる地域では、十一月頃、泥棒の被害が増えます。それほど寒くもなく、クリスマスが気になりはじめる頃で、日本でいえば、年が越せるかどうか気になる時期、ということになるでしょうか。

一年の半分が冬のこの国で、冬至を過ぎれば、又、日は長くなって、クロッカスの咲きはじめる春を心待ちにします。冬至に向かう、日がどんどん短くなる十一月、十二月のはじめに、シント・マーチンの日（注2）や、シント・ニコラウスの日を祝って、子ども達中心の心暖まる行事があることに、冬の長い国の人々の生活の知恵を

感じます。

と同時に、日が再び長くなることへの喜びを表す、各地の昔からの祭りに、キリストの誕生をもってきた、キリスト教の知恵にも驚かされています。冬至が過ぎ日がのびてくると、私のようなものでも、再生、復活、命の

◀ ヒンデローベン教会の木靴



すばらしさを感じ、春が約束されているのを心の底から喜べるのです。

娘みづきは、元気いっぱいこちらでの生活を楽しんでいます。インターナショナルスクール、土曜日の日本語補習校、アフタースクールのクラブ活動、おけいこ事と、オランダの人々からみれば、超多忙（オランダの小学生は、水・金曜日は午前のみ、土・日曜日は休み）なのですが、本人はルンルンの毎日。インターの授業日数は、年間、一七七日しかありません。勉強はびっしり詰めこまれているようですが、その合い間に、ドラマや、コーラス、アンサンブルの活動で、コンサートや、ショーを開いたり、スキポール空港やホテルで歌ってきたり、先日は、オランダのテレビ番組にまで出演してきました。そして今週は、赤い魔法使いになるというので、私の赤のトレーナーに赤いタイツ、赤い靴をはいて登校しています。そして、クリスマス休暇のスキー行きで頭がいっぱい。



▲ ハロウィーン、先生も子ども達も仮装（インターナショナルスクール）

二年近くかかって、英語の学習内容にも追いつき、アフタースクールも楽しめて、存分に生きているナと、そばで見ている、まぶしい位です。

そろそろ、日本語の語い面が気になり出す頃にさしかかってきているかもしれません。しかし、こちらに來たはじめの段階で、夫婦で、いろいろと考え、インターナショナルスクールを選択したのですから、心配しても仕方がなく、日本語の本を読み、日本語の作文、詩、日記、手紙を毎日書く努力を、母子で怠らぬようにするしかありません。

そんな心配よりも、「(野) 鳥に餌をあげなくちゃ、赤い実がなくなって何を食べてるんだろ。」零度近くの庭に出てパンをまき、「あつ、この前植えた球根を、鳥がほり出してる!」と怒り、「ねえ、おかあさん知ってた? ボス公園の鴨や白鳥、冬の間、日本に行ってるんだって! 私、アフリカへ行ってると思ってた。」とびっくりしている娘の少女期を喜びたいと思います。(日本よりも、アフリカの方がここから近いと思うので

すが…、今度、帰って來た鴨にでも聞いてみましょう。)

私は…?

おけいこ事に忙しい駐在奥様の例にもれず私もいろいろと忙しくしています。幸い、娘の学校のおかげで他の国のお友達も出來はじめています。先生のお手伝いに出かけたりします。ヨーロッパというところは、とりわけ、インターナショナルスクールというところは、英語を話せない人もたくさんいて、みんな、お国なまりの英語を堂々と話しながら、“I can't understand what you mean.”なんて言われても平気で、自分の言いたい事が相手に通じるまで、くり返して、会話しているのだと、やっと私にもわかってきました。それまでは、“What?”なんて聞き返されると、すぐ、私の英語がおかしいんだと卑下し、各国のお国なまりの英語、ネイティブの人の早い英語がわからないと、がっかりした時もありましたが、懲りずに話す事で、お互いに、「その人の英語」を

ヨローッパって、そういうところですよ。ですからそれが自分の国の言葉を堂々と話しています。

オランダは小国の故か、商業で成り立ってきた国の故か、国民は、六か国語を学校で習うと聞きます。例えば、オランダ語で何か聞かれて、こちらが分からなかつたとすると、「イングリッシュ? フレンチ? ジャーマニー? スパニッシュ?」と聞かれ、答えた国の言葉でもう一度くり返してくれる、と言った具合です。

今、遅々として進まずですが、オランダ語も勉強しています。お隣のおじいちゃん達が、オランダ語を話すとても喜んでくれるのです。少し郊外に出ると、オランダ語しか通じなくなるので、必要な事位は、お世話になっている国の言葉で話したいではありませんか。

去年の九月から、日本語補習校の昼休みに本読みのボランティアをはじめました。主に低学年の子供達が集まってくれます。又、一月からは、有志の自宅を開放し

日常生活の中で、日本語を耳にする機会の少ない子とも達の、日本語への興味の何かになれば……と思います、さやかな活動を始めます。

オランダに来てすぐ、就学前の日本の子ども達の事が気になりました。日本語獲得に大切な幼少時期を、オランダで暮らす子ども達は、現地の幼稚園や、英語のインター又はブリティッシュの幼稚園に通っています。

冬が長く、又、雨風の日の多いオランダでは、戸外で遊べる日は少なく、日本のように児童館などの施設がないので、家の中の遊びが多くなりがちで、母子間だけの限られた日本語しか耳に入らないのが現状で「言葉が遅いのでは」という心配をよく聞きます。

二度ほど、日本の子ども達がいる、オランダの幼稚園を見学させてもらいました。三歳児十五名のクラスに五名の日本人がいました。先生は、包容力の大きな方でしたが、言葉の壁は厚く、日本の子供達は、困った時に訴える人として、先生を頼ってはいませんでした。母親以

外の大人も信頼に足るという経験を、せっかくの幼稚園で得られないのでいるのが、可哀相でした。日本人の母親達をもっと参加すればよいのにも思いましたが、毎日となると難しいのです。

国際結婚をして、オランダに住む方が、週に二時間だけ、日本語幼稚園をなさっています。先日、一時帰国された方の代理で、手伝ってきました。ユダヤ人の幼稚園の園舎を借りて、二十五名程の三〜五歳児が集まっていました。遊具は使用してはいけならしく、制限の多い中で、午後の二時間、子ども達は、午前それぞれの幼稚園の後、机の前で椅子に座って、「日本の幼稚園らしく」工作や、リズムを、みんなでしている様子に、複雑な思いにかられ、三歳児のT君や、S君の「つかれたよ、遊びたいよー」の声に、思わず、「そうだよね」と口走ってしまいました。自分の「四回だけのお手伝い」の立場、長くてあと三年ちょっとしかオランダにいないであろう事なども考えあわせながらも、たくさんの課題を目の前にした心境です。

この私塾のような日本語幼稚園をはじめられたKさんも「私は、幼児教育の専門家ではないけれど、我が子の幼児期に、日本語の子ども集団が欲しかった。」とおっしゃいます。

ここ二年ほどで、オランダへの日本企業の誘致が増え、それに伴って、私達のような駐在家族も、幼児を持つ若い家族が増えています。日本人の多く住む地域の現地幼稚園や、インターナショナルスクールの幼稚部では、日本人が三分の一から半分を占めるようになっていきます。

全日制の日本人幼稚園がほしいとは思いませんが、（なぜなら、日本語保持の問題は深刻ですが、個人を伸ばしてくれる、小規模のこちらの幼稚園の方が、良いと思うからです）幼児の日本語獲得、保持のための、又、幼児を持つ、若い母親達への何らかの支援の必要性を痛感するのです。

ささやかな日本語幼稚園の活動、私達もはじめようとしている文庫活動、時を同じくして、隣町でも文庫活動

がはじまりました。

文庫関係で、言いたい事は、「絵本、本がほしい！」の一言につきます。

はじめは、手持ちの本を持ち寄っては始めるつもりです。ICBA（国際児童文庫協会）に加盟するので、追い追い数十冊位は送られてくる見通しなのですが……又、デン・ハーグにある日本大使館の蔵書は、かなりなものと聞きますが、ここアムステルダムからは遠く、日常の活動をするのに、いちいちハーグまで出かけられません。アムステルダム全日制日本人学校（小・中学校）の図書室の蔵書もあるにはあるけれど、「良い本に、もっとお金を！」と叫びたくなる現状です。当然の事ながら、幼児向けはほとんどありません。それでも、海外の日本人学校の中では、恵まれた方だと、重々承知しています。

「今はずい分良くなった。昔は……。」とも言われま



▲ オランダの画家アントン・ピークによる、デン・ハーグ、17c

そう、五年後に「今はずい分良くなった。」と言えるよう、目の前に見えてきた課題に、友人と一緒に取り組んでみます。

もうすぐ朝の五時、雪が降ってきました。雪の結晶のまま。

インターナショナルスクールで話す他国の母親達も、それぞれ母国語の保持に力を注いでいます。みんな帰る国があるから。

でも、ここオランダには、帰る国のない人々、難民もたくさんいて、職を得、結婚をして、あの難しいオランダ語を話し、オランダ人になっています。

オランダに来て、いろいろな目の色、髪の色、肌の色の人、車椅子の人、介添えの必要なお年寄りが、当たり前、マーケットで買い物をしていて、ハツとした時の事を覚えています。

オランダに来て、日本では見たことのなかった、インドシナでの戦争の記録映画を、テレビで見ました。

オランダの女王の日、四月三十日の事を教えてくれる隣のおじいさんに、浅はかにも、「昭和天皇の誕生日は四月二十九日、一日違いね。」と親しみをこめて話したつもりが、「ヒロヒトか？」と、急に、厳しい目に変わった時のことを忘れません。

主人の赴任に伴って、日本を離れて生活してみても、良かったと思います。

娘には、人生の長さ以外の事では、もうすぐ追い越されてしまうでしょうが、娘といつまでも、友達のように過ごせるように、主人の話し相手でいられるように、年老いてきた、日本の両親を、そのまま受け入れられるように、四十歳を目の前にして、一九九一年をすぐそこに感じながら、オランダの雪を見ています。

(一九九〇年十二月記)

ハ注1▽シント・ニコラウスの日(十二月五日)

ファーザー・クリスマス・サンタクロースの起源であるシント・ニコラウスの亡くなった日の前日、十二月五日

を祝う。その日より二、三週間前の土曜日に、シント・ニコラウスは、白馬と召使いのブラック・ピートと共にスペインから、船で、アムステルダム港に到着。街を白馬で回り、召使いピートは、子ども達にお菓子をまく。

この様子はテレビ中継される。この日から、子ども達は、夜、暖炉のそばに、シント・ニコラウスへの手紙にプレゼントの希望などを書いて、靴と、白馬のための水、角砂糖、人参などを共においておく。十二月五日の夜、シント・ニコラウスは各家庭をノックし、良い子にはプレゼントを、悪い子は麻袋に入れて、スペインに連れ帰ると言われている。

△注2▽シント・マールンの日

やはり、子どもに優しくしたシント・マールンを祝う日で、夜になると、子ども達は、自分達で作ったランタンを手に、各家庭を訪れ、歌を歌って、お菓子や、果物をもろう。

△注3▽くりん——Kring——

オランダ語で輪、サークルの意。オランダの幼稚園

で、歌を歌ったり、絵本を読み聞かせる時によく使う。子ども達に親しみがあり、私達のいろいろな願いを込められるこの言葉を、平仮名にして、文庫名とした。

(はるにれの会・アムステルフェーン在住)

先月号に引きつづき、今月も保育学会からの報告を藤田美美子先生に書いていただきました。自主シンポジウム「子どもから何をどの様に学んだらよいか」。

教育、保育にかかわる人は、その人間関係の中から、逆に多くのことを学んでいます。もちろん母親も。だからこそ、こんなに手のかかる子育ても楽しいと言えるのでしょう。

＊

「保育者養成の今日的課題」今回で終わります。子どもの出生率一・五三、情報過多、先取り教育社会、という状況の中で、少ない子ども達は一層バラバラになり、人間関係が希薄になっています。良い保育者と出会う意味が重要になるでしょう。前田先生、一年間、どうもありがとうございました。

＊

子どもの視点からの「住まい」について、三人の先生に書いていただきました。子どもの目で生活空間を見てみる

と、小さな狭い空間も、広い世界に感じていることがあります。居心地がよく、なんとなく落ちつき、そこを中心に外へと世界が広がっていく、そんな場所が「住まい」なのでしょう。

＊

ザリガニ第二話。我家のザリガニ君、まだ健在です。可愛いしぐさを見せるわけでもないのに、話しかけたりして何か愛着ができました。毎日見ていると、面白いことも発見します。寝る時は、家の中に入って寝ます。水槽の中に小さな植木鉢を入れてあるのですが、必ず、その中に入ります。狭くて暗い所が好きなのです。そして横になって寝ます。本当に横向きにゴロツたとおれて、足をあげて寝るんです。初めは、死んでしまったのかとびっくりしました。外敵の心配のない自分の城で、安心してお腹を出して寝ているなんて、飼い主（息子）そっくり！と思わず頬がゆるんでしまいました。

(K)

幼児の教育

第九十巻 第十一号

(一九九一年十一月号)

定価四五〇円(本体四三七円)

平成三年十一月一日 発行

編集兼発行人 本田和子

発行所 日本幼稚園協会

東京都文京区大塚二一一一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所 図書印刷株式会社

東京都港区三田五一一二一

発売所 株式会社フレーベル館

東京都千代田区神田小川町三一

振替口座 東京九一一九六四〇

電話 〇三―三三二九二―七七八一

●本誌購読のご注文は、発売所フレーベル館にお願いいたします。

●万一、落丁・乱丁などがございましたら、おとりかえいたします。

生活をつくる子どもたち 倉橋惣三理論再考

倉橋惣三の保育理論を
実践に基づいて確認する



飯島婦佐子・著

倉橋理論実践園の保育を調査研究し、子どもの生活、発達、就学後の成績、母親へのアンケートなどから、この理論の重要性を改めて実証した労作です。

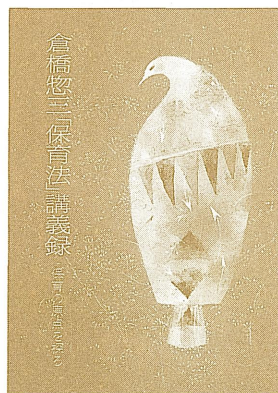


倉橋惣三

東京女子高等師範附属幼稚園の園児たちと

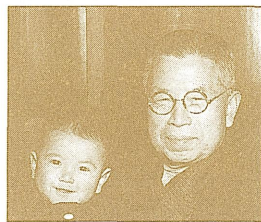
A5判・244頁・定価1,700円(税込)

倉橋惣三「保育法」講義録 —保育の原点を探る—



菊池ふじの・監修
土屋とく・編

保育の原点は、自ら育つ子どもにあるとする倉橋惣三の保育法。新幼稚園教育要領の精神の源です。



- 昭和10年、倉橋惣三が最も円熟した時に行った保育法の講義録です。
- これからの子ども主体の保育への数々の提言がもりこまれています。
- 幼稚園真諦他の著作と対照し、理解の助けとする、脚注付です。
- 新幼稚園教育要領と関連する箇所も示されています。
- 現代の保育にとっての倉橋理論の意義を論ずる津守先生の序文がついています。

B6判・256頁・定価1,500円(税込)

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)3292-7783(代)にお問い合わせください。

キンダーブックの
フレーベル館

豊富な事例、適切な助言、保育現場に役立つ実践指導書

障害児保育実践シリーズ

全6巻

障害をもつ子の保育に必要な配慮はなにか？ いま、保育現場では、望ましい障害児保育について真剣に模索されています。症状も程度も多岐にわたる障害児の姿を十分把握し、一人ひとりの個性を見きわめて保育することが大切です。このシリーズは、たんなる理論書や研究書でなく、保育現場に生かされることを目的とした実践指導書です。

第①巻 自閉的な子どもと保育	第④巻 病虚弱・肢体不自由の子どもと保育
第②巻 発達に遅れのある子どもと保育	第⑤巻 心に問題をもつ子どもと保育
第③巻 ことば・聞こえ・見ることの障害と保育	第⑥巻 障害児保育の基礎

A5判・セットケース入り・各巻平均264頁・セット定価11,124円(税込)

大場幸夫
名倉啓太郎
村田保太郎
森上史朗

編著



障害をもつ子の保育に必要な配慮はなにか？

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)3292-7783(代)にお問い合わせください。

キンダーブックの
フレーベル館